その心臓に宿るもの

ゼオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その心臓に宿るもの

【Ｎコード】
Ｎ０３４０Ｔ

【作者名】
ゼオ

【あらすじ】
そこは此処ではない何処か。魔法や剣があるファンタジーな世界。そこで繰り広げられる笑いあり恋愛あり戦闘ありの学園物語！になるハズ・・・主人公（以後：主）「あ～あ作者自分でハードル上げちゃったよ」作者（以後：作）「…まあ何とかなるでしょ」主「言っとくがあまり面倒に巻き込むなよ…」作「ハッ！俺が書くからには楽できると思うなよ！！」主「うわ…マジめんどくせ～」主人公はチートです。最強ものがニガテナ人はすぐに【戻る】ボタンを押してください。基本的に主人公はめんどくさがりです…でも困って

る人は助けます！タグの［Ｒ１５］［残酷な描写あり］は保険です
※物語を考えていて題名が途中でかみ合わなくなってきてしまったので変更しました

1話

ｓｉｄｅ　ジルエス

俺はジルエス・ジルエス・キト・リヴォルヴ
家は父さんと母さんの３人家族だ
父さんのファーストネームはギースアル。ミドルネームはブラド
母さんのファーストネームはアリシア。ミドルネームはリスウェだ
家はアレグランドの都市部から離れた偏狭な山地の中にポツンと建っている

今日も山で朝からの日課（訓練）をしていたら
組み手で打ち終わった父さんがいきなり切り出した

「お前も、そろそろ学園とかに行ってみたくないか？」

「なんで？」

「ぶっちゃけると教えるようなこと無くなっちったから（笑）」

飲み物を持ってきた母さんも

「私も教えることは全部教えたから～学園生活も大事だし行ってたくさん友達つくってきなさ～い．あと彼女もよ～」

「くれぐれもその左眼のことは他人には話すなよ．使う魔法の属性も一つだけにしておけ！それも火・水・土・風・雷・闇・光の中のどれかだ」

「えっ！？何で使っちゃいけないの？」

「殆どの人が使えるのは1種類だからよ～私とジルエスは使えるけど父さんは使えないでしょ～それと他の属性は古代魔法と言って今じゃ使える人がほとんどいないのよ～」

「そっか～」

「それと編入祝いにコレをやる」
父さんが石のようなものを渡してきた

「なにこれ？」

「それはミスリルだ」

「ミスリルって伝説の金属じゃなかったの？何でそんなものが家に……」

「ツテだよツテ～それで自分の武器でも創っとけ」

（ツテで普通手に入るか！！）とジルエスの心の声

「それで自分の身は自分で守れ！」

「りょ～かい」

色々疑問に思うところもあったが頷いた

「それと…」

「まだあるのかよ！」

「まあこれが最後だ．左眼の眼帯と他に指貫のグローブも渡しとく．コレはお前の魔力と魔法属性を押さえるものだ．さっき言った属性の中から自分が使うヤツを言え．それ以外は封印するから」

「じゃあ～雷で～」

「わかった」

父さんは言うとすぐに作業に取りかかった．そして作業をしながら言った

「解除する方法もあるけど、聞いとくか？」

「聞いとく～」

「魔力だけ解放するときは解放する方に魔力を溜めて『解放（レヴァレイス）』だ。ちなみに魔力の解放量は小さい順に右手。左手．眼帯。属性の方は言霊が『解除（リリース）』だ。緊急時に全部解除するときは『封絶（コントラクト）』。また封印し直すのは、６時間ずっと眼帯とグローブをして過ごしてから『封印（ロック）』だ」

「そう言えば風呂とかどうすればいい？」

「気にすんな。眼帯とかグローブ外しても封印は1日は解けん」

「もうない？ちょっと後で空間魔法使うけどその時試してみるよ～」

「ああ…それと大事なことを言い忘れてた」

「これで最後だろ～な！」

「正真正銘これが最後だ。お前が前々から気になってるおとだと思うぞ」

「前から？それって種族のこと？」

「そうだ。お前は魔族と人間のハーフだ」

「ふ～ん。そう」

「あんまり驚いてないな…」

「まあ話せない理由なんてそんなもんしかなかったしね～」

「そうか…まあその調子なら安心できるな．学園でも頑張れよ！」

「わかった」

それからはトントン拍子に話が進み
俺は編入生として魔法学園に入ることになった

その間に父さんから貰ったミスリルでナイフを１０本作っといた
形状はナイフとメリケンを合わせたようなモノのメリケンの殴るところが波状の刃になってる感じだ
それぞれ２本ずつに火・水・土・風・雷の属性を付与した
このナイフは空間魔法を使って安全装置（セーフティー）を外さなければ魔力も出ないし何も切れないようになっている
ただし封印されていて他の魔法を使えないオレでも魔力を流せば中級魔法までなら封印されていない時と遜色なく使える
他にも機能は付けたがとりあえずこのくらいにしておく

そうして日は過ぎていき
ついに家を出る日が来た
「じゃ行ってきます」
「「行ってらっしゃい」」
「休みの日とかに帰ってくるから」

「おう。楽しんで来い！」

「じゃあ」

（面倒事に巻き込まれなけりゃいいけど…）

俺は学園での日々に胸を踊らせながら（？）歩き出した……

side　out

side　両親

「アイツには幸せになって貰わないとな」

「そうね．私たちが居た時代は争いばっかりだったしね～」

「まだ魔王の残党がいるかもしれんがそこが気がかりなとこだな」

「あの子ならやっていけるでしょ」

「まあアイツにもしものことがあったらすぐ駆けつけれるしな」

「できればそんなことはないと良いんだけど…」

「封印も二重にかけたからそっちの方も大丈夫だといいが…」

「暗くなっていても仕方がないわ！今日はあの子の祝いのために久しぶりに飲むわよ～～」

「そうだな．今日は祝い酒だ！」

その日山には男女の笑い声が響いていたという……

1話（後書き）

ちょっと変えました
5／7

感想とかあったらよろしくお願いします

2話（前書き）

駄文ですが
暇つぶしにしていただければ幸いです

2話

side　ジルエス

「はぁ～．だり～」

今日はディリス魔法学園の前に来ている．
ディリス魔法学園はアレグランドでも屈指の名門校なのだそうだ．
何でかって？
それはかつて魔王が世界征服をしようとしたときに魔王を倒した勇者たちの一人がこの学園の学長をしていたらしい．
そんなわけでここには沢山の優秀な魔術師や剣士．先生がいるそうな．

ちなみに学園に入れたのはコネだと言っていた
国でも屈指の名門校に入れるってどんなコネだよ…っていうか父さん達何者？

時計を見てそろそろ約束の時間だな～と思っているのだが…
行き交う人々の視線が痛い．その中には学園の生徒もチラホラ見受けられる．

何でこんなに見られてんのオレ！？

一言で言えば目立つからなのだが…

今まで他に人を見ることが無かったためそれに気づくハズもなく…

具体的にどんな格好なのかというと
１７０センチ後半の長身．学園の制服．黒髪の整った顔立ち．左眼の無骨な眼帯によって不思議な雰囲気を醸し出してるが（さる理由があるがそれはまた後で）青年のやる気の無さそうな右眼がその雰囲気を相殺している
ついでに父さんからの贈り物と言えるナイフは服の至る所に潜ませている

そのときジルエスの鋭敏な耳が音を拾った
「…や…てくだ…だれ…たすけて…」
声のする方をみると路地裏に続いていた
「厄介事の気配がプンプンするんだけど…」
気になったのと同時に視線から逃げたかったのもあり
声がすると思われる方向に歩きだした
すると路地裏で絡まれる少女とチンピラが１．２．３．．．．．．７人
あの制服は学園の…その前にあの娘って．自分でなんとか出来るんじゃね？
少女はチンピラの中にいて明らかに異なる気配を発していた
しかしそれなら助けを呼ぶ声を聞きつけてきた自分は何だったのかと思い

少し躊躇しながらも踏み出した

「こんな朝っぱらから何してんの？」

2話（後書き）

感想とかあったらよろしくお願いします

3話（前書き）

ジルエスは
面倒くさがりやのはずだが・・・
キャラ変わってない??

3話

ｓｉｄｅ　？？？

朝．私は走っていた

今日は編入生がくると聞いて案内を頼まれたのだ

遅れたら編入生に申し訳がたたないと思いショートカットのために路地裏に入った

男．女？どんな人だろ？私より強いかな？

考えながら走っていたので不注意になってしまったのか

誰かにぶつかってしまった

「すいません！」

脇を通り過ぎようとすると

「そっちからぶつかっといて謝るだけじゃね～」

と腕を掴まれた

「やめてください」

こっちは急いでるのに～いっそのこと潰しちゃお～かしら？

頭ではけっこう黒いコトを考えていた…

「やめる？ハッ！バカなこと言ってんじゃねえ！」

そこにはガラの悪い人が…７人

「やめてください！誰か助けて！」
一応一人でも逃げられるけど～人が居た方が都合が良いし叫んどこうかな～
打算的…

「誰が好き好んでこんな場所にくるんだ？叫び声も通りから離れてるから聞こえるワケね～だろ！」
もうそろそろコイツら再起不能にしてやろう！
コワッ！！
そして
「朝っぱらから何してんの？」
張りのある声が聞こえた
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

3話（後書き）

感想とかお願いします

4話

side　ジルエス

「はぁ～．今日は編入する日だってのにどうしてこう空気読めない輩がいるのかねぇ～」

ナイフつかわなくてもよさそうだな～

ちなみにポケットに手を突っ込んだままである

「誰だテメェ！こっちはお楽しみ中だ．サッサと失せろ」

とリーダーらしいヤツ

「いや～．その娘同じ学園の生徒っぽいし離してもらえると助かるんだけど？」

「離す？今からイイコトするのになんで離さなくちゃなんないんだ？」

取り巻き達が下卑た笑い声を発した

「今思ったけどお前タコみたいだな」

「あっそれ私もさっきから思ってました！」と緊張感のない女の子

「なっ！？」

羞恥からか顔が真っ赤になっている

「オレは「もっとタコに近づいたぞ～」…タ「ほんとだ！？」…「でもあれってもう茹でダコじゃ…」…人の…「まあいいや」…はな…「さっさとその娘の手離したげて～」…しを……人の話しを聞けっつってんだろ～が！散々馬鹿にしやがって！誰が離すか！」

気のせいか少し涙目だ

ジルエスはさっきと変わらず力の抜けた声で言った

「じゃあその右手もらうね～」

何かを感じたのか咄嗟に女の子の腕を掴んでいたチンピラが右手を引っ込め

一瞬後れて横にあった柵が裂けた

「なっ！？」

ジルエスは脚を振り上げていた

「あ～あ外しちゃった．テヘッ（笑）」

そして脚を戻し自身の筋力のみで1秒もかからずに女の子の前に移動した

隠匿歩法．駆

呆けている女の子の手を引いて立ち上がらせそのまま膝下からすくい上げるようにしてお姫様抱っこ（！？）をし

「それじゃこれで～バイバ～イ」

速攻で逃げ出した

4話（後書き）

〈隠匿歩法〉
ジルエスの父さんが作り出した魔術を使わない歩法
〈駆〉相手の死角を突き消えたように見せ急速に接近する

すいません・・・
1部にあった「設定・時代背景（改）」を消させていただきます
今までの設定は忘れてください

そのうち改めてきちんとしたものを出します

本当にすいませんでしたｏｒｚ

5話

「……いつまでこんな格好でいるつもりですか？」

「あ～はいはい」

学園の近くになって少女を降ろした

そして学園の方に歩き出しだ

連れて来るとき周りの殺気や羨望などの視線が突き刺さったが気にしない・・・

視線から逃げるために行ったのに結果的に悪化したことなんで気にしてないぞ！本当だからな！！

小さく溜め息を吐き視線を少女に向けた

近くで見るとその少女がただの少女でなく美少女だとわかった

肩まで伸びた髪は薄い碧色で鋭い切れ眼もサファイアのように深い碧だ

身長は１６０センチ位ありスタイルは女性特有の起伏がハッキリしている

同年代の中でもかなり成長しているほうだろう

と観察していると訝しむような眼で見られている事に気づいた

「ああ～オレはこの学園に編入してきたジルエス・リヴォルヴだ」

「リヴォルヴ…？」

少女は少し考えるような仕草をした

「どうかしたのか？」

「何でもない…」

「ところで～あのチンピラ達自分でなんとかできたんじゃない～？」

「自分でするより他人にヤらせる方が楽ですからね。それと私は２の年ソフィスティア・アクア・ドラケンスです。ちなみにアナタの案内役です」

「そ～だったんだ～。んじゃ案内よろしくソフィー」

「そんなに気安く呼ばないでください。穢れます。軽薄さが立ち姿から滲み出てますよ．」

「ッ！！」

俺は僅かに揺らいだ心を隠すように顔を盛大にひきつらせた

「顔では済ましてつ黒いコトを吐くね・・・じゃあ改めて案内よろしくドラケンスさん」

もう目の前に見える学園の門を見ながら言った

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ソフィスティア（以後ソフィー）

私は考えていた・・・

リヴォルヴと言えばかの有名な勇者達の一員だ

だが軽薄そうなこの男になにか関係があるのだろうか

魔術を使ったような感じはしなかったけどどうやってあんなに速く動けたの？

それにさっきのひきつるような表情の前に見せた寂しげな顔は昔のアイツのようではないか…・・

もしかしたらアイツなのか？

だがアイツの顔が思い出せない・・・

そこだけ記憶からぽっかりと抜け落ちている・・・・・・・

考えていても仕方がない

とりあえず今は案内役に徹するとしよう

私はそんなことに思考を巡らせながら門をくぐった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

5話（後書き）

感想とか批評、
誤字とかあったら指摘お願いします

6話（改）

ｓｉｄｅ　ジルエス

「じゃあ改めて生徒会長として言うわ．
ようこそディリス魔法学園へ。これからよろしく」
とソフィスティア

「おう。こっちこそな～
それにしてもデカいな～この学園」

俺は目の前の壁のような校舎を見上げながら言った

「生徒会長のところは驚かないの？」
と言いながら校舎に入っていった

「まあ。大体検討ついてたしね～それより2年でってところに驚くよ」
それに俺も着いていく

「3年に私よりリーダーシップが取れる人がいたんだけど……
なんか若い者に任せるべきだとか言って拒否して……ぶつぶつ……」
と自分の世界に入ってしまった

このままじゃ埒があかないな…

「お～い戻ってこ～い」

と目の前で手を振ってやった

「はっ！私はなにを…」

少し顔が赤くなってるな～

「愚痴るのは他の人にしてくれよ～それと廊下で歩きながらぼぉっとすんな。危ない」

「あ、ああ。すまない」

「次から注意すればいいさ。で～今はどこに向かってんの～」

「学長室だ」

「へ～」

「もう着いたぞ」

と大きな扉の前で止まった

うおっ！なんかオーラみたいのがみえるぞ！？

「ソフィスティアです。編入生を連れてきました」

「入って良いわよ～」

「失礼します」

「しつれ～しま～す」

目の前にはソフィーに似てる（！？）女の人が学長！！っていう貫禄のある椅子に座っている

ソフィーよりは髪が長いかな～腰まで伸ばしているっぽい

そして体は一言で言えばボンキュッボンな感じだ！背は椅子に座ってるからわからん

「はじめましてジルエスくん・私はシルビー・アクア・ドラグレスよ。ソフィーの母親よ。ついでに親子で竜族」

「やっぱり親子なんですね～」

にしても若いな～でも人は見かけによらないというし～多分３０代後半ぐらいなんだろうな～

シルビーさんが笑いながら

「な～に～を～考えてるのかな～」

背後に般若がみえる！！

「なんでもないですよ～」

平静装ってますが実際は冷や汗かいてますよ．ハイ

「おかえりーソフィーちゃん」

「ただいま帰りましたお母様」

「堅苦しいわね～」

「ここは学園です。仕事に私情を挟まないでください」

「ハイハイわかりました。はぁ～これじゃどっちが母親かわかんないね～ジルエスくん」

「そうですね」

「そこは否定してくれてもいいのに・・・しょぼん・・・・・」

「実際間違ってないと思いますし」

ガガーンというような擬音が聞こえてきそうなほど落ちこんでいるが無視

そこでソフィーが

「では私は授業があるので失礼します」

と言って部屋を出ていった

6話（改）（後書き）

感想、批評あったら
おねがいします。

7話（改）

シルビーさんは立ち直ったのかこちらを向きながら言った

「ようこそディリス魔法学園へ」

「あなたがあの二人の息子か～それにしては魔力量が少ないと思うんだけど。そのグローブと眼帯はどうしたのかな～」

的確に封印しているモノをついてきた

父さん達のこと知ってるみたいだな～

まあ喋ってもいいか

「封印してま～す」

「何を？」

「魔力を～」

「他にもあるでしょ～」

「ありませんよ～」

嘘をついてみた

「あ・る・で・しょ」（ニコッ）

こえぇぇぇぇ〜〜〜

「すいませんでしたぁぁぁぁぁ！！」（土下座）

なんというか笑ってるけど目が笑ってないよ。据わってるよ……

「それでな・に・を？」

「はい！属性も封印してます！」

「封印解いたらいくつつかえる？」

「全部です」

「ぜ。全部・・・・・

まああの二人の息子だしね。はぁ〜」

「さっきから溜め息多いですね。疲れてるんですか？」

「だれのせいで疲れてると思ってるのよ…他には？」

「コレだけですよ」

今度は本当である

「ほんとうに？」

「ええ」

そこで俺をジッと見てきた

「？？？」

「嘘じゃなさそうね。でももう一つあるような気がするんだけど・・・う～ん・・」

あごに手をあてて考えている

後のほうがきこえなかったがまあいいだろ～

「封印はしてませんが左眼は魔眼です」

「ふ～ん。全属性持ちに魔眼か・・・まあ魔眼は突発的にでるからね。ついでに種類は？」

「それは秘密です」

「まあ普通なら魔眼なんて隠さなくてもいいのにね。よっぽどの理由があるんでしょ。わかったわ。ついでにあなたＳクラスの３組ね」

「なんでですか？」

「気まぐれかな～」

「・・・・・」

「嘘よ嘘。あなた相当強いでしょ？魔力量は今の状態じゃ少ないか

もしれないけどね～」

「・・・・・・めんどくさそうですね」

げんなりする俺

「じゃあ頑張ってね。プライドが高いヤツばっかだから色々大変だとおもうけど・・・フフフ・・・・・・」

後ろの方は聞き取れなかったけどなんか急に嫌な予感が・・・

「それとソフィーの護衛もよろしく～」

「なんかあるんですか？それも会長って弱くないですよね・・・」

「まっ、いろいろあるのよ。いろいろ、ね」

「クラスよりそっちの方が大変そうですね・・・」

「じゃっ、この話はここで終わり」

シルビーさんはは話を切るようにパンッパンッと手を叩いた

「この部屋の横に職員室があるからそこで待ってなさい。そのうち担任を行かせるわ」

「わかりました。これからよろしくお願いします」

「こちらからもよろしくね～」

そして職員室に向かった

7話（改）（後書き）

感想とかあったらご指摘お願いします
最後の方をちょっと変えました　5／17

8話

ｓｉｄｅ　ジルエス

今。俺は前を歩く担任について行っている
ちなみに教室までの道のりを歩いている

・・・・・さっきからこの担任が五月蠅い

「ジルエスくんはどこから編入してきたの？」とか

「魔力量が少ないのになんでＳクラスに入れたの？」とか

質問ばっかだ・・・
普通こうゆ～のって教室に入ってからの学生とのやり取りじゃない？
いくつかは答えておいたが・・・

ちなみにＳ－３クラスの担任は女性でシルビーさんより胸がない
どっちかっていうとスレンダーな印象の人だ
身長は１６５センチぐらい。丸目で赤毛のポニテ、いかにも快活そうな容姿だ
学生といっても遜色ないほどだ

名前は……なんだったかな～……ミ…そう頭文字がミ……ミ……
…頑張れ俺！……ミリア…そうだミリアさんだ！！

よくやったぞ俺！！その前に名前忘れてゴメンナサイ！ｏｒｚ

「どうしたの？そんなところで土下座して」
とミリアさんが俺を冷めるような目で見ていた

「ハッ！！俺はなにを…」

メチャクチャ恥ずかしいぜ（汗）

気を取り直して今度はこっちから質問

「この学年で１番強いのって誰ですか」

できればソイツとは関わり合いになりたくない
面倒なのはイヤだからな

「学長の娘のソフィスティアさんよ、ついでにＳ－３クラスね」

もう関わっている……だと。それもＳ－３クラス。
というか強いのがＳクラスにいるのは普通か…

「はぁ～」

「今度はなんですか溜め息なんてついて」

「いや、自分の不運さを嘆いていました」

「はぁ？まあいいです。つきましたよ。ここがジルエスくんの入るＳ－３クラスです。私が先に入って説明するので待っててて下さい」

そう言って教室に入っていった

ミリアさんが入ってから一度静かになったがそれからまた騒がしくなりそれをまた静めているような感じだ

「入ってきて良いですよ～ジルエスくん」

もう一度顔を見せた時にさっきより元気がないと感じたのは外れてないだろう
しかも涙目だし……なにがあった？

そして教室に入り黙って教壇まで歩いていった
「かっこいい～」「あんなのが編入生？」「チッ男かよ」とかいう声が聞こえたけど気にしない～

ちなみに教室はざっと見て５０人ぐらい入る。教壇から見て弧を手前に描くようにして席が配置してあるような構造

「はじめましてジルエス・キト・リヴォルヴで～す。これからよろしく～」
と緊張感のない声で言った、ついでにお辞儀も

「そのひょろい体でオレらのＳクラスに入ってきたの？ウケる～～」
と後ろの方のチャラい男

「まあ学長が決めたことだしね～言っとくけどそこまで弱くないよ。

人を見た目で判断すると痛いめみるよ～」
「なっ！？喧嘩うってんのかコルァ！！」
なんか怒っていらっしゃる
「喧嘩？面倒だからしね～よそんなこと」
飄々と流した
「2人ともやめなさい！！」
とそこで最前列に座るソフィーの声が響き威圧感が襲ってきた
見ればチャラい男だけでなくこの教室にいる数人を除く殆どの人が
歯を食いしばっている
「どうしたの？」
俺が尋ねると威圧感が霧散した。まるで何もなかったかのように
「へえ～今ので倒れないのね。意外だわ」
少し驚いたような顔をしていたがすぐに真面目な顔に戻った
「おいおい、俺とそこのチャラいのだけに威圧すればよかったんじゃないのか？」
「まあなんとなくよ、なんとなく」
「あんたも大概イイ性格してるな…それに口調かわってないか？さっきは如何にも会長ってかんじだったのに」
どこか呆れたように返した

「まあ実力を試すにはこれが一番手っ取り早いから。それと口調はこれが素よ」

「そう。それじゃ～俺が弱くないのがわかっただろうし、どこか座らせてもらえないですかね？」

動けるようになったミリアさんに言った

「あっはい。じゃあソフィーさんの隣に据わって下さい。ソフィーさんは案内など頼めますか？」

「りょ～かい」「わかりました」

そう言ってソフィーの隣の席についた

8話（後書き）

感想とかあったら
よろしくお願いします

9話

「んじゃヨロシク会長兼学年第一位さん」

「・・・・よろしく」

少し間があった・・

「俺なんか気に障ること言った??」

「いいえ。ただその肩書きが嫌いなだけよ。ごめんなさい気にさせちゃって・・・」

と肩をすくめている

「そうなんだ。じゃあなんて呼んだ方がいい?」

「もうソフィーでいいわ」

そのとき教室がざわめいた

「あのドラグレスさんが・・・」「名前. それも愛称でなんて」「なにかあったのか!?」「学園でも呼べるのは数人なのに・・・」

ああ〜うるせ〜

「さっきはあんなに言っといてそれはないんじゃ・・・それにこのざわめきは…」

「気分よ気分。それと実力を認めた人じゃないと愛称では呼ばせな

いからじゃないかしら・・・」

生徒会長のわりにはけっこうおおざっぱな性格のようだ

「まああんたがそう言うんだったらそう呼ばせてもらうけど・・・」

「それよりなんで左眼に眼帯なんてしてるの？」

と不思議そうにソフィーが尋ねてきた

そりゃそ～だよな～この国じゃ魔眼隠してる人なんていないし・・・

「まあ秘密兵器だとでも思ってもらえればけっこうだよ～」

「・・・もしかして魔眼？」

「まあそんなとこかな～」

「親しそうなにしていてすまないが．ちょっといいだろうか？」

・・・嫌な予感が・・・

9話（後書き）

感想とかあったらよろしくです

１０話（前書き）

投稿するのを忘れていたので
一気に２話投稿です

１０話

「親しそうなにしていてすまないが。ちょっといいだろうか？」

いかにも高慢な態度の男が言ってきた

外見は１８０センチあるかないかぐらいの身長。たぶん服の下には引き締まった筋肉があるんだろう

美形で茶髪。人を見下してりような目をしている

「なんですか？アンタみたいな関わるとめんどくさそうなヤツに興味はないんだが・・・・・」

「ドラグレスさんはお前が話しかけて良い人じゃないんだよ」

「それはソフィーが決めることなんじゃね～の？」

「そうね」

「ドラグレスさんと馴れ馴れしくするな！」

「あ～うるせ～な～少し黙ってろよ」

「聞かないんだったら貴様に決闘を申し込む！」

まさかの超展開！？

「面倒だからヤダ」

だが断る！！

「順位が自分より上位の人から決闘申し込まれたら断れないのよ・・・ジルエスくん」
とソフィー
なんだとーーー
「・・・・・マジですか。はぁ～」
今日一番の溜め息をついた
「ごめんなさいね。私のせいで・・・・」
「まあ俺が勝てば良いだけだし～」
「ハッこの学年四位、ソフィスティア様親衛隊の一人ギルバ・ノス・アレスに勝てるとでも？」
何人かの野郎どもが喚声をあげた
「知らね～な。実際闘ったらわかるだろ。というか親衛隊って何？」
「さあ？？そんなものがあるって今知りました」
とソフィー
「自称ってことね・・・。気になんね～の？」
「正直言って気持ち悪いです・・・」
「だとよ野郎ども～」
親衛隊とやらには致命傷の言葉だったらしい

胸を押さえてめっちゃ落ち込んでる・・・ざま～（ m ″

「それよりも大丈夫ですか？仮にも相手は学年四位ですよ」

俺は一瞬で手に隠すようにナイフを取り出し一閃そして仕舞った

他の人には俺の手がブレたように見えただけだろう

そして何をしたのかわからないといった表情のみんなと目を細めているソフィー

「「「？？？」」」「・・・・」

見えてるのはソフィーだけだったようだ

とギルバの制服のボタンが落ちた

「ボタンが落ちましたよ第四位さん」（棒読み）

「おまえが何かしたんだろう！！」

「さあ～それよりいつ決闘すんの」

「流すな！」

「俺が何したかがわからないなら勝てねえよ。そうだな～決闘に勝ったら教えてやる～」

「そうかそれならいい。それとおまえが負けたらドラグレスさんとはもう話すな！」

「わかった～その代わり戦うときは魔術使わないから」

へらへらと馬鹿にして笑った

「なっ！そんなんで勝てるとでも思ってるのか！！」

「勝てるね～使うとしたら学年１・２位ぐらいからだな」

「いいだろう。その魔術を使わないことを後悔させてやる！！」

片や負けるはずがないという高慢な顔。片やいつものように飄々とした顔

２人の間で視線がぶつかった

１０話（後書き）

感想などあったらよろしくです

１１話

ｓｉｄｅ　ソフィー

所変わって闘技場

今は、騒ぎの後から四位の人と‘自称’私の親衛隊の人達が殺気垂れ流しでジルエスくんを睨んでいたので
このままじゃ授業が進まないと授業中にも関わらず急遽決闘が行われることになった。
闘技場は３６０度を観客席に囲まれた楕円形の建物
結界を張ることが出来て、内側の広さは横１５０メートル縦１００メートル。外側は１８０メートル縦１３０メートルだったと思う
観客席の数は１００００人ぐらいかしら

ちなみにディリス魔学の生徒数は３０００人ぐらい
１学年、魔力の多いクラス順にＳ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄそれぞれ５０人ずつ４クラスがこの学園に通っている

「なんでこんなコトになったのかしら」
私は１人呟いた

Ｓクラスの２人が決闘する．なんでも女絡みだとか．片っぽは今日来た編入生だ．などという話が伝染して、闘技場には殆どの生徒が集まっている

今現在、闘技場の真ん中では先ほどの２人が１０メートルほど離れた位置にいて、今にも闘いだしそうにしている

・・・片方は欠伸をしている

「ほんと、余裕というのかしら・・・」

そのとき審判の声が響いた

「はじめ！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ジルエス

「はじめ！」

審判らしいおっさんが言った

で・・・何でこんなにギャラリーがいんの？

「あ～あ．これで完全に目立っちまったよ・・・はぁ～」
俺は、合図があったにもかかわらずポケットに手を突っ込んでいる
「なめてるのか！！」
額に怒りマークが浮かべている
「十分戦闘体勢だよ～」
「それならこちらからいくぞ」
とギルバ
そういえば決闘のルールはミリア先生が言ってたな・・
～回想～
「ではこれから、編入生のジルエスくんのために決闘のルールを説明します．ついでにギルバくんも」
とポニテを揺らしながらミリア先生

「めんどっ」

嫌そうな顔で俺

「なんで俺まで・・」

ギルバも知ってることをもう一度聞くのは面倒くさいようだ

「決闘は魔法・体術・それぞれを使った戦闘で、相手を降参もしくは気絶させ、勝ち負けを決めるものです」

「はいはいしつも～ん・武器は持ち込みありですか？」

武器使ったら楽だし～

「いいえ。無しです。」

ぬわんですと～～

「万が一にも、死んでもらっては困ります・うちの学生なんですから」

あ～～～そ～だった～

「じゃあ相手が重傷でも降参しなかったらどうなりますか？」

「教師である私が止めます」

とあまり大きくも無い胸を張っていらっしゃる

「ジルエスくん？なんか不埒なこと考えてませんか？」

ミリア先生が上目使いで睨んできた

「いいえ～」（汗）

人の頭を覗くとか、どんな特殊技能だよ。シルビーさんもできるみたいだし女の人って怖いね・・・

～回想終了～

１１話（後書き）

次回はいよいよ戦闘です
感想とかよろしくおねがいします

１２話（前書き）

テスト１日目が終わって
久しぶりの投稿です
駄文ですがどうぞ

12話

開始直後、いきなりギルバが手を前に向け魔法を撃ってきた

「【風の刃(ウィンド・カッター)】」

薄緑色の風が切り裂くように吹いてきたが身体を最小限横にずらすことで避ける

「遅いよ〜」

そのとき避けることを予想していたようにギルバの方からぶつぶつと呟きが聞こえて来る。そのあと詠唱が終わったのかギルバは力強い声と共に右手を左から右に振った

「食らえ!!【荒くれる風(ロー・ウィンド)】」

「おおう. 中級魔術か〜でもこれじゃ〜ね〜」

目前まで風が襲ってきたとき、俺は右脚で目の前の空気を斬るように振る

【脚旋(キャクセン)＞鎌鼬(カマイタチ)＜】

俺の右脚が放った衝撃波は相手が放った魔術を打ち消す

「「「はっ！？」」」

観客席にいる学生とギルバ

そこで俺は『来いよ』という意味を込めて手をこまねいてやった

「ふざけるのもたいがいにしやがれ！！」

呆けていたはずのギルバは顔を真っ赤にしている。よほど今のが堪えたらしい

怒らせるつもりなかったんだけどな・・・

ギルバは先程より魔力を膨大に注ぎ込み魔術を完成させる。

俺は黙ってその様子を待った

「はぁ、はぁ、はぁ・・・これで最後だ！！【風技・百牙（ビャクガ）】」

唱えると同時にギルバは両手を振り上げた【百牙】は多くの風による一点斬撃ならぬ一面斬撃。普通は避けるのが無理な上級魔術だ

「うわ～。粗いな～」

そう、普通なら。だが相手は一流でもない学園の生徒、俺の言った

ように魔術にムラがある

「よっと、ほっ、はっ」

そう言いながら俺は魔術のムラを突いて、舞うように避ける、避ける、避ける

「まだだ！！【風技・龍牙（ロウガ）】」

その言葉と共にギルバは上に上げていた手を振り下ろす

こちらは風を高密度に集めて放つ。まさに『必殺』に相応しい一撃。

速度（スピード）も威力（パワー）もハンパじゃない

一応この学園の制服には魔術で強化が施されているが、コレを食らったら危ないどころじゃないぐらいの威力はあると思う

【百牙】で傷を負わせて、【龍牙】でとどめという戦術だったのだろう

って、まてまてこれ食らったら重傷じゃすまね～ぞ？ミリアさんはなにしてんじゃ～い。

と観客席を探すとわなわなと震えているミリアさん

・・・・・・。まあ、食らう気はさらさらないけど～

「どこを見ている！！」

ギルバの声が聞こえ、そっちを向くと【龍牙】が既に目前まで迫っている・・・

「って危な！？」

俺は咄嗟に上半身をそらし、【龍牙】を避けた

ヤバかった～！危うく脚と胴体がオサラバするところだった・・・

「おいおい・・・」

そう言いながらも走り、俺はギルバに肉迫する

「はぁ、はぁ、はぁ、クソッ！こうなったら」

ギルバは近接戦闘に備えるように手を前で構える。俺を迎え撃つつもりか

俺は立ち止まった

「ギルバよ～。確かにアンタは強いけど相手が悪かったな～」

「まだ勝負は決まってないぞ！！」

「そこで提案だ。一撃か無数の追撃どっちにする？アンタもう立ってるのもキツいだろ？最初っから降参は頭にないみたいだし」

「・・・わかった。一撃で決めてみろ。止めてやる！」

「骨何本かは覚悟しとけよ。いくぞ！」

俺は全力とまではいかないまでも、ある程度の力を込めて蹴りを叩き込んだ

「ガアッ」

思った通りにギルバは吹っ飛んで2回3回とバウンドして止まる

俺は悠々と歩きながら近づいていく

「・・・うぐ・・まだだ」

ギルバは立ち上がろうと足を踏ん張ろうとしている

「もう無理すんな～。体ボロボロなのにどうするつもりだ。もっかい出直して来い。それとコレは独り言だが、さっきの【百牙】の構成が少し粗かったかな～。そこが出来てたら約束破って魔術使うとこだった」

「そうか独り言か。まあそういうことにしておこう。」
そう言うとギルバは意識を手放した
「お～い。しんぱ～ん」
俺が審判を呼ぶと、少し呆けていたのか急いでコッチに来た
そしてギルバの様子を確認すると言った
「続行不可能なので、この決闘ジルエス・キト・リヴォルヴの勝利」
「編入生すげ～」「2年の四位に勝つなんて・・・」「さっきのってどうやって避けたの？」観客が沸いた
「よし．終わった～」
そのとき探るような視線を感じて見渡すと一カ所だけ誰もいないのに空いてる席が
「ん？まあいっか」
害のある視線じゃないことを祈りながら闘技場をあとにした
side out

ｓｉｄｅ　ソフィー

「なにあれ・・・」

さっきのは私が初めて見たのとは威力が桁違いだった。中級魔術を蹴りだけで相殺するなんて・・・
ジルエスの目前に魔術が来たとき脚が一瞬ブレたのはわかったけど

「それにしてもあまり攻撃しなかったわね～。わかるだけでも2回だけだし。体が強いのはわかったけど肝心の魔術はどうなのかしら・・・」

疑問に思いながらも私は闘技場を後にした

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　？？？

闘技場に観に来ている人達の中で話し合っている5人
今は誰もここを認識出来ないような魔術が使われている

「面白いコが入ってきたわね～」

「あの人引き入れてみないかな？かなかな？」

「え～やる気なさそうだけど・・・」

「おもしろそうですね～」

「あ、コッチ見たぞ」

「「「「えっ！！」」」」

「ほんとだ」

「認識をずらしてるはずなんだけど・・・」

「すごいね～」

「まあ引き入れも考えておきましょうか」

「やった～」

と闘技場から出て行くジルエスを見ながら話し合っていた

side out

１３話（前書き）

駄文ですがどーぞ

13話

決闘が終わり、教室に戻って授業を受け放課後になった

「で、どういうことだこれは」

今の状況を言葉にすると・・・
席についている俺、それに群がる生徒達、教室のドアや窓から恨みがましい視線を送ってくる、自称、ソフィーの親衛隊一同

・・・軽くカオスだな

学生の中にはクラスメートだけでなく他の教室の生徒も詰めかけてきている

それはもう餌に群がる鯉のようにパクパクと「さっきのってなに！？」とか「うちのチームに入らない！」とか、いろんなコトを訊いてきやがる

つうかチームってなに？学長からは聞いてね～ぞ

気になったので隣でさっきから本なんて読んでいるソフィーに訊いてみる

「なあ、チームってなんぞ？」

するとソフィーは本から顔を上げ

「チームは一緒に活動する一種の仲間みたいなものよ、そのほかにも・・・」

なんでもチームっていうのは
ギルドに入って一緒にクエストや課題をこなすための集まりらしい
人数は2人以上、7人以下で構成

というか俺って・・・

「もうギルドだったら入ってるよ」

「どこの？」

あまり驚かないっぽい

「【粛正の担い手】だったかな～まあ、かれこれ何年かは顔出して無いけど～」

ソフィーや周りにいる連中は目を丸くして「すごっ！？」「そこって・・・」

やっぱりここは驚いたか

「父さんの関係で入ってるんだけどね」

ほんとはそれだけじゃないけど・・・

ちなみに【粛正担い手】は国のギルドのなかでも1、2を争う強力なギルドだ

すると廊下の方からがやがやと騒ぎがしてきた。それもコッチのクラスに向かって

「ということで他のギルドに入るつもりは今のところないかな～」

その言葉を見越したかのように

「それは心配ないわよ～～～～～～」

といきなり扉を開きながら学長ことシルビーさんが教室に入って来た

騒ぎの原因はこの人だな・・・

「「・・・なにしにきたんですか？」」

絶対零度のソフィーと呑気な俺

「ギルドのお話～」

「なんでさっきしなかったんですか？」

これは俺

「忘れちってた、テヘッ♪」

「テヘッ♪じゃないでしょ。テヘッ♪じゃ！で、ギルドの話ってなんですか？」

「そうそう、ジルエスくんはチームに入っても良いわよ～所属してたギルドには手続き取っといたから、学園を卒業したらもどれるし」

「やけに手回しが早いですね」

「そこんとこはチョイチョイッと」

「はぁ、わかりました」

「それじゃ、ソフィーのチームに入ってくれない？」

シルビーさんが俺に耳打ちした

「断っても入れるつもりですね？」

それに小さな声で返すと

「ヒュ～～ヒュヒュ～」

誤魔化すように口笛を吹き始めた

「はいはい、りょ～かいしました。どうせこれも護衛云々とかいうんでしょうし、はぁ～」

「察しがいいようで助かるわ～」

「入らないって言ったらどうするつもりでしたか？」

「学長権限で無理矢理♪」

「職権乱用！？」

「まあまあ、ジルエスくんにも得はあると思うよ～」

「なにがですか？」

「めんどくさいの嫌いならチームに引っ張りだこにならなくてすむし～ソフィーちゃんと仲良くもできるしね」

「一つ目はともかく二つ目は・・・いや、仲良くなっといて損はないか」

「やれやれ、そういうコトじゃないんだけどね・・・」

コイツは何を言ってるんだかという表情で首を振られた

俺変なこと言ったか！？

「ジルエスくんに言ってなかったことも伝えたわけだし～てりゃっ！！」

掛け声と共にいきなりソフィーに飛びかかるシルビーさん

「ソフィーちゃ～ん！！うぐっ」

それにソフィーはアイアンクローでこたえた。ガッチリとホールドされている

そして、冷徹に言い放った

「五月蠅いです。さっさと戻って下さい」

シルビーさんは手を子供のようにジタバタしている・・・

（ほんとに、こうして見るとどっちが親かわからん）

「くっ、ソフィーちゃん腕を上げたわね！？」

その間、どっかから「あの蔑んだ目で見られて～」「いや、あの声で罵倒されたい」「ドラグレスさんに踏まれたいよ～」という声が聞こえて来た

ハッキリ言ってひいたぜ。どんなヤツらだよと見ると，自称，親衛隊の姿

あんなヤツばっかなのか・・・

視線を元に戻すと、いつの間にかソフィーの周囲に半径3メートルの空間ができていて、そこでシルビーさんが宙づりになってブラブラしている・・・

死んでないよな（ーｏ－；）

そして、もう良いと思ったのかソフィーが手を放す

「隙あり♪」

途端に死んだかのように動かなかったシルビーさんがソフィーに抱

きついた

スリスリと、ホクホク顔でソフィーの身体に頬ずりしている

「「「「う、羨ますぃぃぃぃぃ！！」」」と若干巻き舌で親衛隊の数名

「「「可愛ぃぃぃぃぃ！」」」と女子

どっちともシルビーさんに向けられたものだろう

よく見るとマスコットみたいだな・・・

呆れた目で見ていると、俺の中の警鐘が鳴った

１３話（後書き）

感想とか誤字とかあったら
ご指摘お願いしまーす

14話

次の瞬間、一瞬殺気が迸(ほとばし)ると同時にドアの方からソフィー達にナイフが5本降り注ぐ

ソフィーは殺気にあてられたのか身を堅くしてナイフを見ている

シルビーさんは頬ずりに夢中で気づいてない

「クソッ！」

俺は即座にソフィー達とナイフの間に躍り出、ナイフの進路に腕と足の脛を移動させた

―キンッ

4本は仕込みナイフの腹で防いだが1本だけ捌ききれず通過する

よく見るとナイフは刃の部分が濡れていてぬらぬらと光っている

「毒だ、避けろ！！」

後ろから人の倒れる音がした

教室にいる殆どの人が固まっている

俺はナイフを放って逃げようとしているヤツを見つけると、人差し指と中指を横に並べそのほかの指を閉じた手を構えて衝撃波を撃った

【指突（シトツ）＞穿（セン）二連＜】

―ボコッ

衝撃は相手の両肩に当たらず背後の壁を凹ませる

よく見ると衝撃を察知して2つとも避け、そのまま踵（きびす）を返して逃げ出している

「ッ！待て！！」

さっきのを使うには障害が多すぎる！

先ほどまで静かだった教室が事態に気づき騒然としだしたためだ。

その間を縫うようにして襲撃者は逃げる

俺は一喝した

「静かに！！」

すると騒ぎは収まったが、襲撃者には逃げられた。その後、静かになった教室にシルビーさんの声が響く

「ジ、ジルエスくん」

みんなが一斉にシルビーさんの方を振り返る

振り向くと、倒れているソフィーとそれを支えるシルビーさん

シルビーさんは少し怯えのはしった顔で涙目になりながら俺を呼んだ

「ソフィーちゃんが、ソフィーちゃんが！！」

慌てて駆け寄ると、ソフィーが苦しそうにしている。息も少し浅い

「どうしたんですか！？」

「さっき倒れるとき足にナイフがかすって・・」

よく見るとスカートが少し切れ皮膚に傷がついている

「毒か・・・吸い出すぞ」

口調が鋭いものに変わり言うと、傷口に口をつけ毒を吸い出し、床に吐き出した。

それを見てソフィーは顔を赤くしたが、すぐにまた苦しそうな表情に戻った

これを5回繰り返したがソフィーはまだ苦しんでいる

教室にいる生徒は固唾を飲んで俺のすることを見ている

「しょうがねえ！！『解除（リリース）＞水（アクア）＜』！！」

そして傷口に掌を押し当て言った

「【制御（コントロール）】」

【制御】は魔術を使うときに誰もが無意識下で行っている作業だ

それを、俺が意識的にしたものがこれだ

【制御】でソフィーの中にある毒を探す。心臓の方に意識を伸ばしていくと心臓の手前ギリギリまで毒が進んでいる。その毒を血液の流れの逆方向に進ませていくが血液が邪魔してなかなか戻らない・・・この作業で毒を身体から出すのに１０分は掛かった。

毒をすべて出し終えると床に大の字に倒れ込み、目を閉じて言った

「これで良いだろう。はあ、はあ、はあ」

教室から歓声が上がっている

俺は体中に汗をかいていた

ーー相当疲れた、主に精神的に。やっぱ慣れないことはするもんじゃないな〜

途中から口調が変わっちゃったし〜

「「だ、大丈夫？」」

「ああ、疲れただけだから」

目を開けると、ソフィーとシルビーさんがこちらを覗き込んでいる。

少し顔が赤いな・・・

俺は立ち上がるとソフィーの額に手を触れて聞いた

「ソフィーの方こそ大丈夫か？顔赤いよ？」

するとソフィーはますます顔が赤くなり小さな声で

「だ、大丈夫です」

と言って離れた

「それなら良いけど・・本当に大丈夫？」

「大丈夫です！！」

今度はハッキリと言ったが次の瞬間よろけたから慌てて支える。今はソフィーが俺に寄りかかるような格好になっている

周囲の男の学生からの僻みや妬みの視線がキツい・・・

「まだ回復はし終えてないんだから無理すんなよ～」

「は、はい」

恥ずかしいのか顔がさっきより赤くなっている

それから今度はきちんと立って

「そ、それと・・・ありがとう・・・」

ソフィーは笑顔と小さな声で言った

「ど、どういたしまして～」

不覚にもソフィーにドキッとしてしまった

やっぱ笑った方が可愛いな

それを見てシルビーさんが呟いた

「ふ～ん、あのソフィーちゃんにもついに春が・・ぶつぶつ・・」

なんか独り言を言っているシルビーさんの方を見た

「じゃあ俺はナイフ回収しますね～」

「・・・えっ？なに？」

シルビーさんは聞いていなかったようだ・・・

「だから、俺はナイフ回収しますから」

「わかったわ～」

「あっちはシルビーさんがどうにかして下さい」

歓声を上げる生徒達を見て言った

「え～逃げたわね！？」

「正直言ってめんどそ～なので。学長ならそういうの得意なはずですし。あ、ソフィーは怪我人なので頼っちゃダメですよ～。じゃ」

俺はナイフの回収に取りかかった

「う～、みんな、ちゅうも～く・・・・」

シルビーさんはみんなに声をかけているけど、あの調子だとかなり時間が掛かりそうだな

俺はナイフを手の中で転がしながらそんなことを思っていた

１４話（後書き）

感想とかあったらおねがいしま～す

１５話（前書き）

いろいろあって投稿が遅れました
読んで下さっている皆さん本当にすいません

それでは本編を（楽しめるかどうか分かりませんが）楽しんだください

15話

side　ジルエス

今は夕方ぐらいの時刻

俺は寮館の前に来ている。
隣にはソフィー

ソフィーに聞いたところによると、寮館は全体の学生半分ぐらいと教師が数人が住んでいるらしい
今まで校舎内などを案内してもらっていて最後にここにたどり着いた。というわけだ
案内をしてもらっているときに、ソフィーが女神のような微笑みを浮かべていたので、周囲から隠れた（好機の眼差しから怨念まで、数え切れないほどの）視線をひしひしと感じたり、俺に向かって物が飛んできたりしたがその話は置いておきたいと・・・

「ヒュッ」「モノローグの途中で投げてくるな！」

今度は椅子かよ！？

出来れば避けたいところだが後ろにはソフィーがいるので

「せい！」
かけ声と共に回し蹴りを叩き込み、飛んできた方に返す

「あべしっ」

「87番しっかりしろ!!」
「おいっ!!俺たちはそんな軽い思いで集まったのか!?」
「ドラグレスさんにくっつく害虫を駆除するという使命を忘れたか!」

さっきから何十回とこのやりとりが続いている・・・違うのは親衛隊かそうじゃないかだ

「はぁ」

あんなコトがあった後だぞ・・・少しは休ませてくれ!!

「どうしたの?」
上目遣いで本当に心配そうに見ている

「いや、なんでもないよ〜」
男としてドキッとしないわけではないが、これ以上心配させるわけにもいかないので普通を装う。
あ〜あ周りの視線がもう一段階キツくなったyo・・・。それにしても教室での一件以来、少しソフィーの態度が柔らかくなたような〜

実際はソフィーには助けて貰った時の感謝とそのほかの感情もくすぶっているのだが、ソフィーもその気持ちに気づかないのにジルエスが気づく道理もない

まあいいや。考えるのは後々するとしよ〜

すぐさま気持ちを切り替えソフィーの後に続き寮に入っていった

◆

「へ～、思ってたより普通だな～」

寮の廊下は広いがあまり派手な造りじゃなかったからだ

ちなみに広さは横が3メートルぐらい

「意外？」

「まあ意外っちゃ意外かな～。こんだけデカい学校なんだからもっと豪華だと思ってたし～」

「部屋見てみれば？」

「なんかあるの？」

「やっぱやめた。見てのお楽しみ」

そう言いながら広い空間に出た

「ここが食堂よ」

「広いな～」

部屋を埋め尽くす、テーブル、テーブル、テーブル・・・

数百人が座っているが、俺たちが入ってくると殆どの人がソフィーを見、隣にいる俺を見て、男子は羨望や嫉妬の女子は興味津々の視線を俺に向けてきた

「ここは闘技場より小さいけど、この寮の全員が入っても空きがあるぐらいよ」

「風呂とかは？」

「後で案内するわ。それよりも食事にしない？」

「そうだね～。あんなこともあったし」

そのときテーブルにの方から女子の声が聞こえてきた

「お～いソフィー。こっちこっち～」

と手をぶんぶんと振っている赤っぽい色の髪の女生徒。隣には小さく手を振っている白髪の女生徒がいる

「はいはーい。ついでだからついてきて」

そう言ってソフィーは手を振り返し、俺の手首を掴んで引っ張った。それを見た男生徒の視線が殺気じみたものに変わるのにそう時間は掛からないわけで

視線で人が殺せるなら今頃俺死んでるな～

そんなことを考えていると2人の女生徒の前に辿り着いた。2人の左胸を見ると、赤い髪の方は白い横線が2本に黒い縦線が1本。髪が白い方は青い横線2本に黒い縦線が４本

これは学生の所属するクラスだ。横の線の数が学年を、縦線は組を表す
色はＳ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの順に白・赤・青・緑・黄の順だ
さしずめ赤髪の方は２年Ｃクラスの１組。白髪の方は２年Ｂクラスの４組ってとこか

「いっしょにごはん食べよ～。ソフィー」

「はいはい。そのつもりよアイラ」

「・・・」

前者は、先程は離れていてわからなかったが、短いストレートにした真紅の髪に大きく開いた金色の目。どこか猫っぽさを感じる顔立ちだ。アイラと言うらしい
後者は俺の方をジッと観察するように見ている。透き通るような白い髪に緑の目。静かでいて鋭い雰囲気を放っている

居心地わる～

「それで、後ろの人はソフィーちゃんを助けた噂の編入生かな？さしずめ王子様ってとこ？」
アイラがソフィーに切り出した

「ちっ、ちがうわよ」
それにソフィーはどもりながらも答える

「お？慌ててる～。これは脈ありですかな～？」
その様子をアイラは楽しそうに見つめている。この人シルビーさんみたいな人だな

「だからちがうって！！」

「ムキになんなさんな～」

「・・・」

「・・・」（^―^；）

2人が盛り上がっている横で、もう2人は互いを探るようにしている。

本気≪マジ≫でこの沈黙はキツいぞ・・・

「・・・ボソ・・・」

「わっ！スイがしゃべった！？」

「ほんとね～初めて会った人の前では余りしゃべらないのに」

2人ともよほど驚いたようだ。さっきまで話していたのを忘れたようにスイと呼ばれた女生徒を見た

スイは俺を指して言う

「・・・濃い血の匂いがする・・・」

俺はその言葉に驚愕した

「え！？」

と続いてアイラが驚く

「それってこれのこと？」

俺は心の中での驚愕を表に出さないようにしてポケットからナイフを取り出す。放課後にソフィーが襲撃された時のものだ

たがそれをスイは首を横に振って否定する。そして俺に聞いてきた

「何人？」

この意味することはすぐにわかった。人を殺ッた人数だ。俺は苦笑しながらそれに答える

「両手の指じゃ全然足りないぐらいかな～。できればやりたくはないんだけどね～」

「「？？？」」

訳が分からないという顔のソフィーとアイラ

「そう」

そんな中でスイはしっかりと頷いた

「この話は取り敢えず終わりでいいか？いまからメシのつもりだから」

「うん」

スイは渋々といったふうに頷いた

「ね～ね～2人してなに話してんの～？」

「ないしょ～」「うん」

「うおぅ！？いつの間にか仲良くなってる～！？」

その反応に驚くアイラ

さっきから驚いてばっかだな～。この人

その様子をソフィーはジト目で見ている

「女の子と仲良くなるのは早いのね・・・たらし・・・」

その言葉は俺のハートを撃ち抜いた

え？キューピットの矢みたいにって？バカいっちゃいけないよ。そりゃもうどでかい槍で「グサッ」って擬音が似合うぐらいの威力だったぜ

「うぐっ・・・」

「どうしたの？そんな悲しそうな顔して」

あんたのせいだよ！？あんたの！

「はぁ～、何でもないよ～」

「そう。じゃあ前置きが長くなっちゃったけど紹介するわ、髪が真っ赤なこっちが」

「アイラ・ナタム・グライトスだよ～ん。アイラって呼んでね～」

見た目通り元気に紹介して、握手をする

「こっちの白い髪の方が」

「スイ・フェンル。スイ、でいい」

「まさかのファーストネーム！？よほど気に入られたみたいだね～。編入生くん♪」

とバシバシ俺の肩を叩くアイラ

そういや大事なこと忘れてたな～

「あ～、自己紹介がまだったな～。俺はジルエス・キト・リヴォルヴで～す。呼び方は何でも良いよ～」

「それとジルエスは私達のチームに入ることになったわ。事後承諾だけどいい？」

ちなみにソフィーには、俺がチームに入ることはあの騒動の後にシルビーさんから伝えてある

「いいよん♪ヨロシク、ジルっち」

まさかの即答。この人は疑うことを知らないのか？っていうかその前に

「ジ、ジルっち！？」

「うん。ダメ、かな・・・」

上目遣いで大きな瞳をウルウルさせながら俺を見ている

「う、わかった・・・」

（だって断ったら俺が悪いみたいじゃん。それに親しみを持ってもらえるにこしたことはないし～）

「よろしく、ジル」

「スイはジルか・・・。まあいいか、こうゆうのは気にしたら負けと言うし、うん。んじゃ、２人ともヨロシクな」

（あ～無視してきたけどもう無理だわ。さっきから俺の背中に刺さる視線の密度とかがハンパない）

「それとちょっと外の風に当たってくる」

「ご飯は？」

「じゃあ食ってからでいいか。どうしたらいいの？」

「あそこまで行って注文すればすぐだよ」

とカウンターを指差しアイラ

「ついでに私のも注文してきて。よろしくね」

とソフィー

「はいはい。わかりやした〜」

俺はそれに渋々ながらも了承する。そして席を立った

15話（後書き）

ちょくちょく投稿が遅れることもあると思いますが
これからもよろしくお願いしますm（＿＿）m

16話

◆

それからソフィー達と食事を済ませ、今は独り外を歩いて夜風に当たっている
食事の途中で楽しそうに話していたら男の生徒陣から多大な殺気をいただきました
それと風呂の場所は食事の後に教えてもらった

「ふ～食った食った～」

後ろから何人かが付いて来ている。十中八九さっきの食堂にいたヤツだろう

いちいち相手にするのもだり～な～、ど～しよ～かな～
今ある選択肢は
1、逃げる
2、返り討ち
3、話し合い

2はめんどいし、3なんて論外だろうから断然1だな～。よし、そうと決まったら逃げるぞ～

俺は走り出す

「待ちやがれ！」「はやっ！？」とか声が聞こえたような気がするけど気にしな～い

と、いきなり隣に走る人影が！？

「なにしてるの」

なんと俺が気付かないとは！ってスイかよ

「鬼ごっこかな」

「おに？」

「あ～、それは置いといて、何しにきたの？」

「ジルと話し」

「そう。話す前にちょっと場所変えるぞ～」

まだ走りは継続中なのでどっか座れる場所ないかと探す

おっ、あそこでいっか

俺は外周を一回りして見えてきた寮の屋上を見る。そして、そこを指差しながら言う

「あそこでいいか？」

「うん」

とスイは頷く

「自分で行ける？」

「うん」

「じゃ行くぞ～」

そう言うと共に俺は飛び上がり、一気に屋上にたどり着いた

スイを見ると寮館の壁の突起とかに足を掛けて上がってきた

本当にBクラスか？

スイは屋上にたどり着くと、屋根に膝を抱えて座った。俺は立ったまんまだ

「スイってスゴいんだな～」

「どこが？」

「普通に屋上まで駆け上がってるし」

「ひとっ飛びのジルにいわれても、皮肉にしか聞こえない」

下を見ると、寮館の前を数人の男生徒がキョロキョロしながら通り過ぎて行った

「それもそ～だな。で、話って？」

「さっきの。はぐらかされたから」

「げっ、バレてたか～」

「話してくれないと信用できない」

「え～。でもな～」

「でもも、ストもない」

「スイがそうゆうこと言うのなんか面白いな～」

「は、はぐらかさないで！！」

スイは顔を赤くして怒鳴った。

からかっただけなのにな～

「めんどい～」

「ジルは血の匂いが普通の人の比じゃないんだから。話して」

「そんなに匂う？」

「うん」

「へーへー。言えばいいんでしょ言えば、めんどくせ～。んじゃ喋るぞ？実は俺、昔あったことがきっかけで死に対する嫌悪とか恐怖がないんだわ。それで、ギルドの仕事とかで重罪者とかの殺ししたり、後は盗賊の討伐とか～」

「そのとしで・・・」

「まあ、たまに山から降りてきて、ギルドに寄るときにな」

「やま？」

「え～と、確か『雷峰山』だったかな～」

「・・・そこって第一級危険区域だよ・・・」

「そーなんだー知らんかった」

果てしなく棒読み

第一級危険区域に住むってマジで父さん達何者だ・・・

自分も住んでいることを棚に上げて考えるジルエス

ちなみにあまり両親のことを詮索したりしてないので2人の素性は殆どわからない

「そんなところに住んでるなんて、危険すぎる」

「いや～それほどでも～」

「褒めてない。それよりも、ジルって何者？さっきから聞いてるとただの編入生じゃない」

「さあ？」

実際父さん達からはなにも聞いてないしな～

「さあって・・・」

「まあ、いいんでね～の？死ぬ訳じゃあるまいし～」

「はぁ～」

俺の言葉を聞いたスイは、ため息をつくと夜空を見上げた

「それじゃ今度は俺からしつも～ん」

「なに？」

俺は足を前に投げ出して、スイの右隣に座る

「さっきの何でわかったの？」

「においがした。たくさんの、色々な血のにおい」

「ふ～ん。普通は気付かないハズなんだけどな～」

「私の鼻がよすぎるの。私、『氷狼（フェンリル）』の血族だから」

『氷狼』は魔族の中でも結構上位の種族だ。普通は森の奥に少数で集落をつくって暮らす。名前の通り、氷を使う狼に変わることができる。外見は体長１～３メートルぐらいの真っ白な狼だ。人間の姿をしている時でも、鼻は人間の数万倍はある。ちなみに竜は人間の約１００～５００倍くらいだから、どれだけずば抜けているかがわかる。

「『氷狼』か～。だからそんなに髪が白いの？」

「違う・・・。村のみんなには髪に色があった。白いのは私だけ」

声がこもって聞こえたのでスイを見ると、いつの間にか顔を膝の間にうずめている

やっべー、地雷踏んだか？

ちなみにこの世界の地雷は、火薬の代わりに魔法を主に使ったものです

そしてスイは声を震わせながら言う

「なんで私だけ髪が白いの？みんな、みんなは綺麗な色があるのに・・・」

さっきの鋭い雰囲気はかき消え、今では寂しそうに背中が小さく見える

「綺麗だと思うけどな～。俺なんて黒だぜ黒。ありふれてる。スイみたいな色の髪はそうそういないんだから、もっと前向きでいいんじゃない？」

俺はそう言いながらスイの髪を梳く

「村の人の何人かが気持ち悪いって・・・」

「それって妬みとかじゃないの？自分にないモノを持ってると、他人はそれに嫉妬するからな～」

「そうなの？」

「そうだ。だからあんま深く考えるなよ～」

「でも・・・」

「でもとか言うな。みんな同じヤツなんていね～よ。俺は心の壊れた欠陥品で人殺しだけど、スイは髪が白いことで悩んでる、ただの綺麗な『氷狼』の女の子。俺より健全だと思うよ？」

「そうかもしれない。けど、ジルは良い人だとおもう」

スイは埋めていた顔を上げ、俺をしっかり見ながら言う。その瞳は少し充血して赤くなっている

「血の臭いがするのに～？」

「臭いだけじゃわからない」

「買いかぶり過ぎだな～」

俺はスイの頭を撫でた

スイは気持ちよさそうに目を細める

「それでもいい」

「そうか～。でも、何でこんなコト話そうと思ったの？今日会ったばっかりなのに」

「わたしも、おなじ、だから」

スイは声を少し落として言う

「ふ～ん。まっ、そっちは話したくなったら話してくれりゃ～い～よ。それで、髪の方の悩みは無くなった？」

「びみょう」

スイは苦笑いしながら言う。だけどその顔は寂しそうな先ほどの背中を考えさせないような表情

「そんな簡単に解決するわけない、か。まあ、これから少しずつ踏ん切りつけてけばいいだろ」

「うん」

「つうか、俺の話しからスイの悩みの方に話しがいっちゃったな～」

「・・・」

「まあいいや、それじゃ～戻るか」

「うん」

１６話（後書き）

読んだ感想などなど
お待ちしているので
どしどし送ってください

17話

「ここ」

スイは部屋の前で止まった

「ここが？」

「そう」

そう、状況がわからない方もいると思うがなにはともあれ俺は部屋の前にいる

ぶっちゃけ、屋根から降りた後、スイに風呂とか案内してもらったのだ

スイの説明によると、一階が施設とか教員の部屋で二階が男子部屋、三階に女子部屋があるらしい

そして俺は扉を開け

「ようこ「バタンッ」」

即座に扉を閉めた

「「・・・」」

「ここって俺の部屋だよな？」

「そのはずだけど・・・」

スイに確認を取るが、間違いないっぽい

俺は意を決して扉を開いた

「う～。どうして閉めたの～？せっかく待ってたのに。プンプン」

「その前に、なんであなたがここにいるのか教えて貰いましょうか？シルビーさん」

そう、目の前にはこの学園の学長であるシルビーさんがいるのだ。前腰に手を当て、プク～と頬を膨らませるという「いかにも怒ってます」的な姿勢（ポーズ）付きで

「ジルエスくんが来るのを待ってたの♪」

切り替え早いな～

「ふざけるのは余所でやって下さい」

が、俺はにべもなく言い放つ。そしてこれから俺が住むであろう部屋を見渡す

「・・・なんじゃこりゃ・・・」

シルビーさんに意識が向いていたこともあり、驚きが隠せない。

廊下があんなに普通だったのはこういう部屋の豪華さが原因なんじゃね？

なんたって最上級の宿並みの仕様だ。

広さは目測１０×７メートル四方。まず見えるのはフカフカっぽい大きなベッド×２。その隣にやけに煌びやかな机、ソファー．エトセトラ．ｅｔｃ．・・・・

ん？ベッドが２つ？まあいい後で聞こう

「あ、スイちゃんもいたんだ～」

「ここがジルのへや」

いつの間にかスイはベッドに腰掛けている

「ね～ね～、２人とも聞いて聞いて～」

「豪華すぎるだろ・・・」（。□。；）

「・・・聞いてる？」

「スイ～、上の部屋もこんな感じ？」

「もうちょっと物が多いけど、基本的に同じ。それと私は友達と相部屋」

相部屋ってことは俺にも同居人（ルームメイト）がいるのかな～

「聞いてよ～」

「そっか～。今度スイの部屋見せてもらっていいか？」

「ダメ！！」

「即答かよ！」

「・・・りょ、寮長にバレたら・・・ガクガクブルブル」

スイは小さな声でブツブツと何か呟いている

「ん？なに？」

「うわ～ん。2人が構ってくれないよ～」

空気のような扱いだったシルビーさんが泣き出した。よほど無視されたのが寂しかったらしい

まあわざと無視してたんだけど～

これは勝手に俺の部屋に入っていたお仕置きだ

「どうどう。シルビーさん泣き止んで下さい。話聞きますから」

と俺は五月蠅いおば・・・ゲフンゲフン、もといシルビーさんをあやす

俺が思考の中でおばさんと考えてたらシルビーさんの眼が光った。が、すぐに泣いていたシルビーさんに戻る。あの眼には逆らえそうに無いです、はい

「わたしは馬じゃないよ！」

「じゃじゃ馬根性はありそうですけどね」

「・・・プッ」

その言葉に思わず吹き出すスイ

「スイちゃんなに笑ってるの！？」

「笑われちゃいましたね？」

「・・・グスッ」

「あ～ハイハイ、聞きますから。埒があかないのでサッサと話して下さい」

と俺はめんどくさいので手を顔の横で降りながらシルビーさんに話をするよう促した

「じゃあ改めて」

そこでシルビーさんは真剣な表情で俺に向き直る。さっきのは嘘泣きだったようだ

「昼間はソフィーちゃんを助けてくれてありがとう」m（＿＿）m

「そんなことですか。コッチとしては、全部捌ききれなかったせいでソフィーに危険が及んじゃったんで、逆に謝りたいぐらいですけどね～」

「それでもよ」

「まあ良いですけどね。今思ったんですけど、シルビーさんって真

剣な顔も出来るんですね～。意外」

「私を何だと思ってるのかしらコノ子は・・・」

え？ただの親バカですけど？

「え？ただの親バカですけど？」

「な、なんでそのことを！？」

と大きな反応（リアクション）で驚くシルビーさん

思っただけのつもりだったがどうやら口からでてしまったらしい。

というか自分が親バカの自覚あったんだ・・・。シルビーさん、なんて残念な人

「教室での態度見たらだれでも分かると思いますよ～」

「うんうん」

「そんな！？スイちゃんにまで！」

「学園のみんな知ってる」

どうやら周知の事実らしい

「シルビーさんって抜けてますね～。天然ですか？」

「天然？」とスイ

「天然天然言わないでぇーーーーーー。私、学長なのに、学長な

のに・・・。大事なことだから2回言ったわ♪（キリッ）」

「じゃあもうちょっと日頃の態度を正してください。今のとか」「うんうん」

「え～態度変えるなんてだる・・・無理だよ～」

シルビーさんはいつの間にか俺の部屋のベットに仰向けに乗ってバタバタしている

おい今なんて言おうとしやがった？

「じゃあずっとそのままでいやがると良いですね（ムカッ）」

俺はフッカフカそうなソファーに座り込みながら言う

うわっ吃驚ほんとにフッカフカ！？

「そんなヒドい。見捨てられたわ（ガク）」

「プハ、漫才みたい・・・」

とそれを見たスイは笑いを堪えながら呟く

「自業自得です。で、話がさっきのだけだったなら早く戻って下さい」

「つれないな～。ジルエスくんは」

「つれなくて結構。てかめんどくさいですし」

そろそろ絡みがダルくなってきたし
「スイちゃんは良いのに？」
とシルビーさんが身を起こす
「ちょっと話すことがありますから」
「そう。じゃあ2人共ごゆっくり～。他に誰かいないからってイケナイことしちゃダメだよん（ニヤリ）」
そう言って扉の前で振り返り意味ありげな笑みを浮かべている
「だれがしますか！！」
「ハイハーイ。それと明日のことスイちゃんから聞いといてね♪じゃあ、バイビ～」
ようやくシルビーさんが部屋から出ていった。あの人がいると疲れるな～
「イケナイこと、する？」
スイが顔を少し下げて上目遣いで俺を見る
その瞳は、純真無垢そのもの
「スイ、意味分かってるの？」
危うく理性がフェードアウトするとこだったぞ
「ん～ん」
首を横に振るスイ
「そんなこと人前で言っちゃダメ」

「なんで？」

「イロイロと危ないから」
ほんとアブナイ、主に男性が。いや、意外に女性も・・・

「ん。わかった。で、話ってなに？」
スイが首を傾げている

「ソフィーのことなんだけど～。３階にいる間だけでも護衛？みたいなのしてもらえないかな～って」

「ジルじゃ無理なの？」

「無理じゃ無い。が、上って男子が入ったらどうなる？」

「う～ん。年に何回か男子の侵入があったりするけど、みんな寮長さんがあんなコトやこんなコトを・・・ゴクッ」
スイはその時のコトを思い出したのか息を呑んでいる

「・・・ほらね。そんなとこだと思った」
俺の顔の筋肉は引きつり気味だ

「その前にソフィーちゃんそこまで弱くないよ？むしろ私の方が弱いし」

「そこはあんまり関係ないんだわ。強いて言えば殺気に当てられてすぐ動けるか、だな。ちなみにソフィーはダメだった」

「私、動けないと思う」

「昔、村に居たとき狩りとかしたことないの？」
「ある。けど？」
スイは俺の真意を測りかねているのか疑問顔
「多分殺気当てられたら条件反射で動けると思うよ？殺気に当てられるのは慣れるしかないし～。狩りって独特の緊張感があるじゃん？あれって殺し合いに近いとかじゃなくてそのまんまだからさ～。狩るか狩られるか、みたいな」
「ふ～ん。わかった、やってみる。けど期待しないで」
「はいはい。それでさっきシルビーさんが捨て台詞的なのを残して行ったけど、あれってなに？」
「明日のコト？たぶん魔闘会」
「何それ？」
「この学園でどの位の強さなのかとか知るための試合？戦闘？みたいなの」
「うへ～、なんだってこんな時期に編入させたんだ～。めんどくさ」
「強制参加。手加減は良い。武器はあっても無くても。勝ったらご褒美」
「よしガンバるか！」

「・・・随分態度に差」
急に態度が変化した俺にジト目で視線を投げ掛けてくるスイ
そんな蔑むような目で俺をみないで～
「人間何事も気持ちが肝心だからね～。フッフッフッ、明日から楽しみだな～」
正直『ご褒美』と言うフレーズが耳から離れない
「めんどくさいって言ってた」
「まあいいじゃね～の」
「じゃあその調子でチーム戦も」
「うぇっ！？そんなのもあんの？」
「うん。ギルドチームでそれぞれが出る」
「良いけどさ～」
「じゃあ遅いし帰る」
簡潔な言葉と共にスイは立ち上がり扉の前で立ち止まる
「また明日」
「ああ。また明日～」
スイはこちらを振り向かず、それだけを言って出て行った

「ふ～疲れた。まだ初日なのになんだコノ疲労感は・・・。つうか今日1日色々ありすぎだろ！厄介事の臭いしかしね～ぞ。」と俺は今日あったことを振り返る

思い出してみたが・・・、俺何でこんな色々巻き込まれてんだ？

「あ～やめだやめ。こうゆうときは寝るに限る！！」

俺はそう言うとベッドにダイブする

ん？そう言えば同居人（ルームメイト）のこと訊くの忘れてたな～

そんなコトを思ったが、すぐに意識を手離した

１８話（前書き）

ちょっと野暮用で遅れてしまいました
テストとかテストとkじゃテストとか！！
学生ってめんどくさいです・・・

お待たせしてしまいましたが今回は短いです
それでは本文をどうぞ

18話

side　スイ

現在、友達（ルームメイト）との部屋にある自分のベッドの上で寝転がっている

「はぁ」

スイは少しだけ頬を染め溜め息をついていた

――私ってなんであんなコト話したんだろ？あんなに濃い血の臭いを纏ってたのに。挙げ句の果てには泣いちゃうし。でも撫でてもらうのは気持ちよかったな～。・・・今になって恥ずかしくなってきたかも。

「どうした～。溜め息なんかついて～」

「ふぁっ！？」

吃驚して変な声を出してしまった

話しかけて来たのは友達兼ルームメイトでもあるライカ・カトラム。後ろで括った髪は漆黒。背は１８０ｃｍくらいで身体の発育が私と同じであまりよろしくない・・・、自分で言ってて落ち込んで来た。男勝りな気概を持つ同じ学年のクラスメート。その容姿や言動からファンの数も多いらしい。今現在、私の顔を覗き込んでいる。

――それにしても近い・・・

「なんでもない」

「もしかして戻ってくるのが遅れたこと関係あるとか？」

――私の言葉はスルーですか

「そんなところ」

「もしかして男？」

「半分正解、半分間違い。最初はソフィーたちと、その後ジルと話した」

「スイが男とか？意外なコトもあるんだな。それも呼んでいるのは愛称」

顎に片手を当て、此方を不思議そうに見るライカ

喋り方は男っぽいが、そういうところが気になるのはやはり年頃の女性のサガか、瞳をランランと輝かせてスイを見ている

「そうだけど・・・。不味い？」

「不味くは無いが、今までそんなコト無かったからどんな心境の変化なのかな、と」

「わかんない。でもジルの傍ではリラックスできてた。と思う」

「例えばどんな風に？」

「それは・・・な、内緒」

その時のコトを思い出したので顔が火照ってきた

――私が泣いて慰めてもらったなんて口が裂けても言えない

「ほー。あの鉄仮面の異名を持つ雪姫がな～。どんなヤツだ？」

謎の単語が耳に入る

「雪姫？」

「スイの二つ名みたいなの。みんな言ってるぞ。知らなかったか？」

「知らない」

「それよりもソイツはどんなヤツだったんだ？」

「黒髪黒眼、左眼に眼帯。それに、変な人」

「ああ！今日闘技場で編人生（そんなヤツ）が戦ってたな」

ライカは納得したように頷いている

「その人」

「それで、そんなに顔を朱くしてどうした？」

尋ねてくるライカは「ニヤニヤ」という擬音が似合う顔

「気付いてた？」

「まあ、面白かったから放ってた」

「・・・意地悪」

「意地悪でけっこう。珍しいモノも見れたし」

「ぶぅ～。言ってくれればよかった」

「残念だったな。もうそろそろ寝るぞ。明日から大変だからな」

「う～。・・・わかった」

「灯り消すぞ」

「お休み」

「ああ、お休み」

灯りが消えると同時に私はベッドに潜り込む

「変な人・・・ほんとに、変な人」

スイは呟くと、眠るために目を閉じた

side out

side　???

ある薄暗い部屋の中

「クソッ!!」

部屋の主と思われる人物の罵声が響き渡る。その声には、誰かに向けられた明確な怒気や苛立ちなどが含まれている

「いきなり出て来やがって!!何なんだ。クソッ!化物が!!」「ドンっ」

全ての苛立ちを込めるようにテーブルに手を叩きつける。暗さのせいでその表情は伺い知ることは出来ない

「あ〜、どうすっかなー、計画の邪魔だから・・・、消すか」

すると多少は気がまぐれたのか考えるような仕草をし出した。声にも先ほどの怒気を含んでいた時より余裕がある

「ククッ。俺の邪魔をした報い、受けて貰うぞ。そうとなれば準備は万端にしなけりゃな・・・・・」

そして言葉通り、計画（いやこの場合は欺計と言った方が当てはまる）の準備をし始めた

side out

１８話（後書き）

今回で第１章は終わりです
投稿が遅れることはかなりあると思いますが
これからも本作品を読んでいただけると幸いです
でわ

1話

「知らない天井だ」

いや、ここは学園だったか。何ボケてんだか

段々意識が覚醒してくるにつれて自分がどんな状況なのかを把握する

起きた時刻は早朝の日が昇る頃。いつもの癖でこんな時間帯に起きてしまった。

大会か～。昨日は頑張るって意気込んでたけど…、よく考えると面倒極まりなっ！！くっ、ご褒美の言葉につられてしまった～。でもスイにはあんなコト言った手前ザコに負けたらシャレになんねーし

「だるっ！あ～あ、何で頑張るなんて言ったかな、昨日の俺のアホ」

と身を起こしながらも自らを卑下

こんなことをしていても何かが良くなる訳でもない

気を取り直し、日課をこなすため上着を羽織ってから部屋を出た

◆

向かったのは寮館のすぐ近くにある林

昨日散歩してソフィーの”自称”親衛隊とかを撒いたところだ

俺はその中に直立で集中する

そして身体中を流れる魔力を普通の数倍の速度で循環するよう『意識』する

これは即座に魔術を発動させる為の準備みたいなものだ

そしてそのまま近接戦闘の型を繰り返し、速度を速めていく

「…チュンチュン……」

林には鳥の囀りだけが響き渡る

本来激しい動きをすると息が上がるというが、その乱れた息すら聞こえない

ジルエスはまるで軽い運動をするような涼しい表情をしている

一連の動きをし終え、息を落ち着かせて地面に座禅を組む

さっきまでは囀りだけが聞こえていたが、どこに居たのかとゆうほど鳥やリスのような小動物がわいてきた。中には肩に乗るものもと、五感が鋭敏になったことで今まで気付かなかったが一本の木に違和感を覚える

「誰だ」

「あ〜あ、ばれちった♪」

弾むようなそんな声と共に木の蔭から人が出てきた。同時に俺の周りにいた小動物が散る

出てきたのは綺麗と言うよりカッコイイなどの類(たぐい)の言葉がよく似合う女性。ナイフのように鋭い目に短く肩まで切りそろえられた茶髪、背は俺の目線ぐらい。姐さんとか呼ばれてそうな雰囲気だ。発育は…なんか鉄拳が飛んできそうなので止めとこう

「今失礼なコト考えなかった？」

「べつに～」

なんという勘！！やっぱり考えなくてよかった～。考え続けてたら「なんとなく？」って理由で殴られてただろうし

「それにしても此処にいるなんて偶然ですね『瞬天』殿。任務ですか？」

ん？ああ、この人は知り合いだ。それもギルドの。名は沙耶・タムルス。親が片方、東の方から来た人だとか。アクセントとかが特殊なのはそのせいだ。『瞬天』は二つ名。由来は割愛する

「懐かしい魔力の気配感じたから来ちゃった。そっちこそなんでこの学園に居るのかな～？『道化』君」

『道化』は俺の二つ名。何でも、本気(マジ)で戦うときに普通の時と全く変わるらしい。その時二つ名を付けられた。どうでもいいが

あっ、それと二つ名はある程度の強さがないとつけられないっぽい

「学生生活を楽しんで来いって言われたんで。それと此処に来るためだけに”アレ”使って無いですよね？理由が『俺を驚かす』とか

だったとしたら怒りますよ？」

「ギクッ！？ふ、ふ～ん。お姉さんはさっき君が言った通りよ。内容は秘密♪」

誤魔化しやがったよ…。実戦でもなかなか使わないのに何やってんだか

少し呆れた。訂正、大いに呆れた

「蔑んであげましょうか？」

「冗談言っちゃって～♪」

「…」

「な、なによ…」

ちょっぴり涙目

年長者としての自覚はあるんだろうか…

先輩の行く末が危ぶまれる今日この頃

「何でも無いです。それと何かしら被害を被るようだったら潰しますから。だりーんでやりたくないですけど」

「最近の若いもんは恐いね～」

「みんなこんなもんですよ」

「君だけだよ。自分の害になるようなのを簡単に潰そうと息巻くのは。「めんどくさ」とか言いながらキッチリ仕事はこなすし」

「まあ、依頼放棄はした覚えはないですけど」

「でしょ～。まあこんな話は置いといて、今日から大会頑張ってね～。上の方で待ってるよ～」

「最初っからそれを知らせたかっただけなんじゃ…」

「ふふっ。それと先輩への敬意が足りないんじゃない？じゃ、お姉さんはこれで～」

と俺の言葉から逃げるように沙耶さんは立ち去った

「です」とか「ます」は付けてたんだけど…

敬意が足りないってどういうことなのかな～と思いながら部屋に帰った

2話

―ガチャ、キー

「…」

部屋に戻るとフードを被った何者かがソファーに座ってジルエスを迎えた

「あれ？俺の部屋だよね？」

勿論それは分かりきっている

俺は表面ではいつも通り飄々として、裏では警戒心を最大に引き上げソイツに対峙した

俺がここまで気付くのが遅れるのは相手が相当な遣り手だからだろう。もしかしたら昨日ソフィーを襲ったヤツかもしれない

そういやソフィーに投げられた毒ナイフの解析してなかったな～とか考えついたが、今は頭の隅に追いやる

俺の反応を見た相手は口を開いた

「そうだよ」

そう言ってソイツは頭を覆うフードを取る

出てきたのは透き通るように白い髪。短く実際はどうか知らないが手入れされているように綺麗だ。スイの髪が雪というのなら、こち

らは月と言ったところか

スイって自分の髪コンプレックスみたいだから今度言ってみようかな〜

白い髪を見て思う

俺を見る双眸は深紅、その瞳には昏く深い闇が垣間見える

色の抜けたような白い髪、健康的とは思えないほど白くシミ一つない皮膚、深紅に染まった瞳は、色素欠乏症—所謂アルビノと呼ばれる体質だろう

色素欠乏症には魔術的要因で色素が失われる場合と、通常の身体が色素を持っていない場合がある。一般的には後者が殆どを占める

スイはアルビノって知らないのかな〜。知ってたらそこまで気に病むこともないと思うんだけど

「今日から同居人になったカイル・カテナ。事情は学長に聞いてくれ。クラスはD、殆どの生徒より年上だが学年は2。敬語とかいらないから」

どこか素っ気ない言葉。ってゆーか年上かよ

「わかった。けどDはねーだろ」

そんな言葉が口をついて出た

俺のの本能が警鐘を鳴らすのは気のせいではない筈だ

「手抜きなんていくらでもできるからな」

「ふ～ん」

意味ありげな言葉に納得

「俺はジルエス・リヴォルヴだ。まあこれからよろしく」

「ああ」

俺は手を出したが、エストは握手を拒絶するように軽く手を顔の横で振った

「ノリわり～な～」

「そういう質(たち)だ」

「あっそ」

と、その時ドンドンと扉を叩く音と女の子の声が籠もったように響く

「カイ兄さんいるー？」

「…俺の連れだな」

カイルは右手で眉間を揉んでいる

少し俯く耳には高そうな深い碧の耳飾り

そして立ち上がると扉を開き、声の主と向き合った

「何で此処にお前がいるんだ」

「う～ん、迎え？」

「別に迎えに来なくてもいいだろ。俺は子供か」

向こうを見ているのでわからないが、今カイルは憮然とした表情をしているのではないか。そんな風に思わせるように声に不機嫌さが滲んでいる

「あっ！昨日決闘してた人だー」

女の子はをカイルの肩越しに部屋の中にいる俺を見つけると自分にかけられた言葉を無視して驚いた

カイルが体を半身ずらしたことで女の子の姿が見えるようになる

ツインテール？と言うのだろうか、黒というカイルとは対照的な髪を両側で結んでいる。顔は幼さが残るような感じで、活発そうなことが窺える。

背は隣がカイルだから小柄に見えるが女子としては普通ぐらいだろう

ちなみにカイルの背は目測俺より少し高い。１８０ちょっとといったところか

「どーも。ジルエス・リヴォルヴでーす」

立ち上がりながら挨拶を交わす。流石に座ったまんまじゃ失礼だろう

「どーも。リーン・リンセイアです。カイ兄さんの妹です」

俺が自己紹介をすると相手の女の子もそれに倣ったように返した
さっきから兄さんって言ってるけど妹？イニシャルが違くないか？
俺は疑問に思ったが、それに答えるようにカイルが口を開く
「下の名前が違うのは俺が破門されたからだ。破門されてもコイツが勝手に兄と思ってるだけ」
「カイ兄さんが冷たい…」
カイルの言葉を聞いたリーンは目に見えて気を落とす―
「そんな上っ面取り繕っても俺は慰めたりしないから」
「ちぇー。残念」
ように見えただけだった
「行くぞ」
カイルは簡素な言葉と共に立ち去る
「あっ、ちょっと待って～。これからも兄のコトをお願いしますね。ではまた」
去り際にリーンはそう言い残すとカイルを追っかけてった
「朝っぱらから元気だね～。取りあえず教室でも行くか」

そう呟いた後、少し寛ぎ制服を着込んでから部屋を後にした

3話

「はぁ」

教室に来てみたはいいものの、無人

「集合場所間違えたっぽいな～。つうか思い起こしてみたら聞いてないじゃん！？」

静まり返った教室に声が反響する

1人しかいない教室は意外に寂しい

他を当たろうと扉に手を掛けたが

―ガラガラ

俺が力を込める前に突然扉が開く

そこにいたのはソフィー

走ってでもいたのだろうか、髪は乱れ服装が崩れている姿は昨日のキチッとした姿からは想像できないほど色っぽい。思わず目のやり場に困ってしまうほどに

「丁度よかっ「ここにいたのね。早く行くわよ」

動揺を隠そうと声を出そうとするがソフィーはそう言って俺の右手を握り走りだす。俺は引きずられるようにしてついて行くしかない。生徒会長さんよ、廊下走って大丈夫なのか？と思ったがそれは口に

出さなかった

「ゴメンね、集まる場所教えてなくて。編入してきたのを忘れてたわ」

「いいよ、でも次からちゃんと伝えてね～。まだこの学園のことあんまり知らないから」

「善処するわ」

「そっ。で、どこに向かってるの？」

「昨日ジルエスがドンパチした場所よ」

「ドンパチってなんかソフィーの口から出ると新鮮だな」

昨日も同じようなこと言った気がする…まあいっか

「そう？」

それにしてもまた闘技場か

会話が途切れ、無言で走る2人

そこで俺はなにか予感めいたものを感じる。それも悪いほうのう～ん？このまま行ったらヤヴァイと感じるのは気のせいか？

とりあえず現状を確認してみよう

走っている俺とソフィー。２人の繋がれた手と手

はいココちゅうもーーーーく！

繋がれた手と手！！

こんな所見られたらどこぞの親衛隊とかが魔法とかぶっ放してくるような状況下にいることをわかって貰えただろうか

と、考えているうちに闘技場の入り口が見えてきた

これは性急に手を離して貰わなければ！俺は静かな学園生活をおくるんだ！

昨日の騒ぎでジルエスは学園で注目され始めているのに気づかずにそんなことを思っていた

「あの～ソフィー？」

「何？」

「手を離してもらえないかな～？」

「聞こえないわよ。今は急がなきゃ！」

結構な速さで走っているせいで起こる風切り音で聞こえないっぽい

「いやそういう問題じゃなくて…」

「うじうじ言わないの。口より足を動かしなさい！」

「はい！」

強い口調でソフィーが言うのに咄嗟に「はい」と返してしまった

闘技場はもう目前

ああ、終わった…

諦めた。思考を放棄した

「はぁ～」

俺は後々起こるであろう出来事を思い溜め息をつく

振り返ってそんな様子を見たソフィーは不思議がりながらも手を離さず闘技場のゲートをくぐった

そこには生徒が客席とかに座ったり立ったりしている

途端に集まる視線、視線、視線、…

俺には嫉妬ややっかみ等の負の感情とやらを纏った視線が注がれる。

勘弁してくれ

「あの野郎ソフィスティアさんの手を握りやがって」「なんであんなヤツが」「殺す殺す殺す」

それに何処からか怨嗟の声もあってさあ大変。ってゆうか最後の怖いよ！

まだ編入してきて2日目なのに…。強引にでも手を振り払うべきだったか？

それを会場の上の方から聞こえる司会者の声が掻き消した

『最後の人が来たみたいですね。それでは各々楽にして聞いて下さい。これよりディリス学園魔術戦闘大会の開始を宣言します』

その宣言に会場が湧く

宣言をしている人は高い所にある賓客用？の席に座っている。隣にはシルビーさんも

それに俺とソフィーって最後だったらしい

そして１回戦の説明があった

主に期限は１日

得物はそれぞれで使っていいが、一度本部で刃引　きをしてもらうこと。自分で出来るならそれでも可

刃引きしても殺傷力はあるんじゃ？と思ったがそこは大会の間だけ学園全体に結界を張り、致命傷になりうる攻撃は威力が弱まるようにしてあるとの説明が

だが致命傷クラスの攻撃を受けた学生は戦闘不能になるので避けなければ敗退だ

１人１個ずつ配られたバッジを奪い合う。バッジは左胸に必ず付けること

奪ったバッジを左胸に翳すと収納できる

どうやったらそんな事出来るんだろなと思った俺はオカシイのだろうか

自分のも合わせて２０個集め、最終日まで守りきると2回戦に進める
バッジを奪ったらその人が集めたバッジも数に含むことが出来る
場所は学園内なら何処でもいい

まあこれだけ広ければ大丈夫そうだけど。学園の広さは一辺５００
メートルの正方形ぐらいらしいし

それと仲のいい人達で組んでも可、闇討ちや裏切りも有りのえげつ
ない戦い
ということだった

最後のとか、なんつう大会だよ。後々の怨恨とか勘弁なんですけど～

バッジは説明の途中で配られていた

外見は盾をバックにして真ん中に装飾の施された綺麗な剣があり、
龍がその剣に蜷局を巻くようにして存在を示している。装飾の淵を
黒く、その内側を白く精巧に造られているコレはそこらの武器より
よほど値が張るだろうと感じた

最後の説明の所で俺に注がれる視線の密度？威力？が増したのは気
のせいだといいな～

説明が終わったとこで漸く俺は切り出した

「ソフィー？」

「何？」

「もうそろそろ手を離して貰えると助かるんだけど？視線が痛いし」

自分たちがどんな格好をしているのかと集まる視線に気付いたのか
咄嗟に振り解くようにして手を離すソフィー

「いてっ」

「あ、ごめんなさい！」

そう言うソフィーの頬には朱が差している

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だからちょっと離れて！！」

この態勢はヤバイって！

心配したソフィーが俺の手を大事そうに握るもんだから目前に女性特有の膨らみが晒されて理性が…
俺が大きな声を出すからもっと視線が集まってくる

暫くはそんな遣り取りが続いた

それから落ち着いて周囲を見渡すとアイラとスイを見つけたので合流した。そのときときアイラがソフィーをおちょくってまた真っ赤にさせたのは余談

「なんだか大変になりそうだと思うのは俺だけでしょうか？」

「あ～ヤバいかもね～。多分狙われてるよジルっち」

「…ガンバって」

「スイに同意ね」

「三人とも果てしなく他人事だな！？なんか心当たりあるか？」

「多分私達に囲まれてるからじゃない？端からみたら美人侍らせてるんだから」

「両手に華ってヤツだね♪まあ完璧に八つ当たりだと思うけど～」

「…美人？…私も？」

疑問に思ったのか首を傾げるスイ

「スイちゃんかわいい～。ギュッてしてあげる、ギュッて」

アイラはキョトンとしているスイに抱きついた。それでもスイはいつもの無表情を貫いている

「…苦しい」

「ゴメンゴメン」

アイラが離れると同時にスイは俺の目の前に来て言った

「…手、出して」

「こうか？」

言われた通りに右手を出す。するとその上にスイの握られた右手が置かれた

「？」

「…あげる」

スイが手を退けると俺の手の上にはバッジが1つのっかっていた

「いいのか？」

「…戦い、キライ」

その短い言葉で理解した

「ほ～、去年は誰にもあげなかったにょに？」

「…ジルなら、優勝できそう」

「努力します…」

人に期待されるのはなんだかムズ痒い。でも特別嫌いな訳じゃない

「あ、そうだ。スイ耳貸して」

そこで思い出したことがあった

「…ん」

「スイと同じで髪が白いヤツ見つけたぞ」「！！」

驚いてる驚いてる

「アルビノって知ってるか？髪が白い人は他にもいるんだから、まあそこまで気にするなよ」

「うん！」

いつもしているだろう無表情が消え去り満面の笑みを浮かべるスイ

突然だった

ソフィーとアイラも呆然としている

俺に注がれていた視線、怨念のような声も一瞬だが意識から追い出される

それほどスイの笑顔は強烈だった

スイが無表情に戻り我に返ると、先ほどの倍以上の視線と怨嗟に晒されたけど

そんなことをしているうちに第一回戦開始のカウントダウンが始まる

『5』

「じゃあ私は離れてるわね。ジルエスの近くにいると大変そうだから」

意識を取り戻した（といっても気絶していた訳ではない）ソフィーが俺から距離をとる。俺に向けられるその瞳は心なしかさっきより冷たいような気がする。俺なにかしたかな～？と考えたが分からな

かった

『4』

「じゃあ私はジルっちの近くにいよっかな～。楽しそうだし」

本当に楽しそうにアイラ

『3』

「…私も、離れる…ガンバって」

「りょーかい」

スイは一言言うと俺から離れて行った

『2』

「戦いだったら合法的にアイツ始末できるんじゃ？」「よし、協力してアイツ葬り去ってやろうぜ」「リア充は死ね！」

周囲の怨嗟がさっきより酷くなってるよ…。始末とか言ってるし

『1』

「はぁ」

俺は今日で、多分一番深い溜め息をついた。あとカウントは1つ、周囲にいる人たちの殺気が膨れ上がる

『0』

今ここに戦いの狼煙があがった

4話

『0』

その声と同時に何人かが俺の居たところに飛びかかっている
既にそこには俺はいないが
結果、飛びかかってきた生徒はぶつかって皆伸びてしまった
ぶつかったときに金属音が響いたのは得物を手にしていたからだろう。伸びた人の近くには剣などが落ちている
目が覚めないうちに早速バッジを回収

1．2．3．4．5．…8個か。意外に集まるの早いな

これで10個集まった。数にしてノルマの半数。すぐに左胸のバッジの前ぐらいに翳すと消えてしまう

開始早々この調子なら楽そうだな

そう思ったのも一瞬
直後に司会者と代わったシルビーさんの声が響いた

『おお～っと。カウントが終わって一瞬で編入生君がバッジを10個手に入れたようです！！編入生を倒すと今ならそれが獲得できますよ～。頑張ってくださ～い！』
とかなんとか生徒に要らんことを吹き込みやがった

悪魔だ、あそこに悪魔がいる！！

そんなことを思いながら俺は司会席にいるシルビーさんを一睨みす

ると、迷わず闘技場から逃げようと踵を返した
が、そこはさすが実戦が主な魔法学園の生徒。俺の前に回り込む者が数名
俺はソイツらを見据えると、出し抜くために相手の一挙一動を観察しながら走り続ける

大人気だな～俺。嬉しくないけど！

2人が近づいてくる。それぞれ握っているのはナイフと…鎚ですか！？
ナイフを持っている方が早く俺に辿り着き、切りつけてくる
横に一閃を上体を少し逸らして避けると、脚を使って払いが来たのでしゃがんでいる相手の頭上を跳び越えた

あくまでも最優先事項はここからの脱出であって敵対者の撃退じゃないからな～

着地して顔を上げると既に鎚を振り下ろす生徒の姿が。”今の俺”が避けるには少々キツい速さ
残った選択肢は「迎え打つ」の一文字のみ

しゃーない。やるか

自然と口の端がつり上がる
俺は振り下ろされる鎚に掌底を放つ。鎚と掌が衝突する寸前に鎚と同じ速度に腕を引き、負担を肘で受け止めた
俺の足元には地面の陥没した後が。これは殺し損ねた衝撃があったためだ
生徒は、自らの攻撃を正面から受け止めて無効にした対象（オレ）を呆然として見つめていた

俺はその脇を抜けて闘技場の入り口を目指す
今の攻防の合間に唱えたのか、前にいた3人の放つ魔術が俺に降りかかってきた

【土の恵沢】【蛇炎】【雷電】

【土の恵沢】は強化魔法、指定した魔術の威力を増大させる
【蛇炎】は速度は少し落ちるが、放った炎を操作できる
【雷電】は直線に飛ぶ稲妻。俺もよく使うメジャーな技だ

強化の魔術が即座に出ると言うことは同じチームだからか

「炎はわっちに任せるのだ♪」

俺の後ろを着いてきていた（全く気付かなかった。さすがSクラス）
アイラが飛び出す間際に言った
そのまま【蛇炎】に近づいて行き、腰に挿していた剣を抜き放つと
同時に【蛇炎】が2つに割れた、既に剣は鞘に納まっている。居合いだ。剣が速すぎて眼が追いつかなかった

普通の剣じゃ魔術がそう簡単に切れる筈がないんだが…そこは技術で切ったのか？それとも剣のおかげ？

一瞬のやりとりを見てから俺は迫り来る【雷電】に目をやり、どうやって潰すか選択する

「同じのでいいや【雷電】」

詠唱破棄

俺が呟くと紫色の稲妻が飛ぶ。普通だったら黄色っぽい色なんだが…、俺は何故か紫色。紫電って呼んでるけど何で普通と違うかは知らん

俺の放った【雷電】と相手のそれがぶつかり爆発した
爆発によって巻き起こる土煙に視界が覆われるが、視界の悪さを無視して突き進む
土煙を抜けると戦闘の構えを見せる2人

…2人？もう1人は？

そんなことを考えながらも殴りかかってきた2人を地面に投げて進む

【土棘壁】

【土棘壁】土によって壁を形作り、その表面に土の棘を拵(こしら)えたもの

声が聞こえた方を振り返ると、さっき強化魔法を使った生徒が肩で息をしている
あともう少しだった闘技場の出入り口が塞がっていた

倒せないと悟って閉じこめようと思ったのか

逃げられないと思ったのかゆっくりとこちらに迫る生徒達。みんな眼が据わってるよ

俺は手品のようにナイフを二振り取り出すと前に突進し壁に突き刺す
そのまま魔力を込めた
手元で紫色の光が爆ぜる

壁は耳が痛くなるような音を立てて崩れ落ちた

その様子を見て慌てて走り出す生徒達を一瞥し、俺は闘技場を飛び出した

5話

あれから数時間が経過

「ふ～疲れた～」

「お疲れしゃま～。大人気だったねジルっち」

「全くもって嬉しくねえ」

逃げ回った末、校舎の屋上にたどり着いた俺とアイラ

「でも、バッジ沢山集まったよ？」

「は？」

その言葉に呆ける俺。逃げている間バッジは取っていなかった筈だ。それにどこにそんなものが…

「ほら！」

そう言って小さな袋をポケットから取り出し逆さにするアイラ。ジャラジャラと小さな袋からは有り得ないほどのバッジが溢れてくる

≪収納袋≫冒険者が多様する。見た目の小ささからは考えられないほどの物を入れることができる高価な魔具（マジックアイテム）だ。間違っても学生が買える額じゃない…ハズ

「用意がいいことで」

「備え在れば憂いなしなんだよ～♪ジルっちが倒したのを他の人に取られるのも何かイヤだしね～」

得意げな顔でアイラ。どうやって手に入れたのかが気になるが…聞くのも億劫だ

「それで～どうする？いる？」

「じゃあ１０個くれ」

バッジは全部で４０に届くぐらいあった

（意外と倒してたんだな俺）

そんな事を思いながらも手は動き左胸の前に翳したバッジは消えた

これでノルマは達成。逃げ切れば2回戦に進める

「私も貰っていいかな？元はジルっちが倒した人のだけど…」

「いいんじゃ？アイラが拾わなかったらここに無いし」

少し遠慮がちに聞いてくるアイラ。意外と気にしている。何もしないで貰うのは後ろめたいのかもしれない

「やった！！ジルっちの近くにいると楽だと思ったのは間違いじゃなかったのさ～♪」

前言撤回、ぶち壊しやがった。呆れてものも言えないとはこの事か

「ん？どうしちゃったのジルっち。黙り込んじゃって」

「…はぁ」

頭を抱える俺

「あれ？私なんかしたかな～」

（何もしてないからだよ…）

そんな中、耳に飛び込んできたの　はシルビーさんの声

『ピンポンパンポーン。現時点でのバッジのノルマ達成者は９３人で～す。因みにバッジは２０個集めたからってそれ以上集められない訳じゃありませーん。つまり沢山集めるほどノルマ達成者が減って、２回戦に進めなくなる人が多くなりま～す。さあじゃんじゃん集めて敵を減らしましょー。集め終わって無い人は時間も残り少ないから死に物狂いで頑張ってね♪追伸：バッジを２０個集め終わると色が変わるよん♪目立つからお気をつけて～。以上！！』

なんかキャラ崩れてないか？それとも初対面の時は作ってたとか。教室での一件もあるしなー。…気にするだけ無駄か

気を取り直して―

「ホントだ色変わってる～。スゴーイ」

アイラが結構な声量で驚いていた

間の抜けた声に力が抜ける俺
思った矢先にこれだ。マジ緊張感ねえなアイラ
この時、俺の中でアイラはアホな子に決定した
アイラに促されるようにバッジを確認すると、盾は白銀、剣は黄金に、龍は蒼くなっている
無駄なところに金掛けてんなと思ったのは言うまでもない
と、なんか周囲に人の気配がたくさん…
「げ、見つかったか！！」
気付かないうちに攻撃する気なのか、魔力があちこちで練られている
「何で見つかったんだ？」
さっきから”俺の”気配は完全に消してるしわかるはずは無いんだけどな～。あれ？なんか見落としている気が…
そこで気付いた原因は…
「アイラか！！」
「ひゃっ！？なに？何か起きたの！？」
突然の声に肩がビクッと跳ねキョロキョロと周囲を見渡すアイラ
さっきの大声だな。今のも十分デカいけど
「あ～囲まれちゃったのか～」
「逃げるぞ。いちいち戦わなくても逃げ切ればいいんだから」
「正直言うと～？」

「面倒だ」

「りょーかいでアリマス、ジルっち」

「ふざけてる場合か」

俺らは小言を交わしながらも屋上から飛ぶ

「やっほーい」

声のする方を見れば俺に続いて飛んだアイラ。と、その後ろからも

…いらないのがたくさんついてきた

魔術だ

それも空中で当たるぐらいの絶妙なタイミング。これでは避けれない

狙ってたのか偶然かは知らないけど厄介だな！

脳内でこの状況を打開する策を探る

アイラは俺の顔を見て何を思ったのか後ろに振り向き、言った

「ジルっちに私の力を見せてあげるのさー」

「は？」

俺は自分でも間抜けだと思う声を出して呆けた

6話

空中で腰にある剣の鞘口に左手を添え、右手で柄を握るアイラ。眼を細め真剣に言葉を紡ぎ始める

「其の本質は焦滅
天上に仕えし龍
託されぐぎゅっ」

蛙が潰れたような声とはこういうことを言うのだろうか。ん？原因は何だって？

俺が引っ張ったけど？
それも襟を思いっきり
さぞかし苦しい事でしょうね（笑）

「な、何しちゃってんねんジルっち！」

頬を膨らませていらっしゃるが

「どんだけぶっ放すつもりじゃボケ！！」

俺はそのアホ面に向けて怒鳴った

魔術を相殺するのにどんだけ高度な魔力練ってんだよ！下手したら校舎の半分から上が吹っ飛ぶぞ！？

「え？なに？馬鹿なの。馬鹿なんでしょ？」

「ジルっちが怒った。キャ～♪で、どうするのこの状況」

俺は黙って襟を掴む腕に力を込める

「え゛？ちょっまっ…何するつもり笑い方おかしくない笑うっていうか嗤ってるし」

「オシオキだ」

アホな子を刻々と近づく地面に向け投擲

「ギャーーーー…」

落ちていったがちゃんと着地した。チッ

それと女の子があげていい悲鳴じゃないでしょそれ

さてさて目下魔術による追撃を受けている&落下中の俺は邪魔（アイラ）な人が居なくなったとこで呟く

【雷】

あらかじめナイフに内包しておいた雷の魔力を呼び起こす

それを魔術に向けて放射状に放った

―バチィィィイイ！

ナイフは紫色の残像を残しながら飛来する魔術を切り裂く
俺はその様子を見ながらアイラの横に着地する。投げたナイフは鋼糸を柄に巻きつけておいて回収
「よくも投げてくれやがっちゃったなジルっち。後で痛い目見せてやるぅ～」
「はいはい。後で、な。今は目の前に集中しろよ～アイラ」
走り出す
さっきの放送の限りだともうそろそろ予選は終わるはずだ。それまで戦うのめんどいから逃げ切ろう
そんなことを考えながら校舎の間を駆け回っていたら建物の陰から誰かが出てきた
白い髪が目に映る
咄嗟に地面を蹴り上げて飛び越え、着地点で停止した。振り返り際に声をかける
「適当に負けるもんだと思ってたけど？」
「そうも言ってられなくなった」
建物の陰から出てきたのはカイルだった

「その人だ～れ？」

「…ああ、いたんだアイラ。同じ部屋の人だよ」

「扱いが酷い！？白い髪ってスイちゃんと同じだね～」

「そうだな。で、何で負けられなくなったんだ」

「さっき部屋に来たリーンがいただろ？」

「あのツインテの子か」

「アイツはあれでも1年の首席なんだが…」

「はは～ん成る程。ここでは落ちこぼれって言われるDクラスの兄貴にベタベタしてたら何かいちゃもんつけられた、と」

何の脈絡もなくテンプレ乙という言葉が頭に浮かぶ。どういう意味だ？

「そんな所だ」

「で、これからどうすんの？」

「後少しで予選は終わるだろうから適当に歩き回るさ。ノルマは果たしてるからな」

カイルの左胸に付いているバッジは既に色づいている

―ピィィィィィィイイイイイイ

話している最中に甲高い音が鳴り響いた

『今の音は予選終了をお知らせします。現在戦闘中の人達は戦闘を止めて下さい。止めなければ失格とさせていただきます』

―ズドォォォオオン

その言葉が言い終わると同時に雷が落ちたような音が鳴り響いた

っていうか雷だろ今の、オイ

『なお、この学園の戦闘は魔術によって監視されているので悪しからず』

…ひでえ。普通それを先に言うだろうと思ったのは言うまでもない

俺の心情をよそに放送は続く

『あ、今ので何人か脱落してしまったみたいですね。予選を通過したのは１１４人です。それでは皆さん一度闘技場に戻ってください。勿論戦ったりしたらさっきのより威力を倍にしたのが飛んできますよ？では』

「こえ～鬼畜だなありゃ」

「ふぇ～。放送の人恐いね」

「急ぐぞ」

「へいへい」

俺たちは闘技場に向けて走り出した

7話

闘技場に到着するとまたも思い思いの場所にいる生徒さん達。
搬送されてる人もいる。多分気絶したとか、さっきの雷を受けた人だろう。…御愁傷様です。

予選開始前と同じところにいるシルビーさんが口を開き、生徒は注目する。

『はいはいみんな集まったわね～。何人かはルール破って伸びてるみたいだけど。次からもルール守らない人はさっきのみたいのが降ってくるよ～。それじゃ次の試合の説明をするわ。よろしくサリア』

そう言ってシルビーさんは隣の金髪の女性に立ち位置を譲る。朝、司会とか説明をしてた人だ。

『第一回戦は明日行われます。形式は今日と殆ど同じですが、バッジは用いません。およそ15人で戦ってもらい、全体から8人のみがトーナメントに出られます。組み合わせは明日に伝えられます。以上で明日の戦闘の説明を終わります。なお、負けた人は魔闘大会が終わるまでの期間は自由にしてもらっても構いません。あくまで学園内でですが。では解散して下さい』

ぞろぞろと闘技場から生徒達が立ち去っていく。

これからどうしよう？

そんなことを思った時にソフィーの姿を視界に認めた。

カイルが口を開く。

「じゃあな」

一言残すと人が流れる闘技場の入り口に歩き去って行った。

「ソフィーあそこにいるけど行くか？」

「そだね合流しよ～。お～いソフィー」

アイラが声を張り上げるとソフィーはそれに気づき近付いて来た。

「どうだったの？」

そう聞くソフィーのバッジは色が変化していた。無事予選は通過したみたいだ。

「これを見るのさ～」

アイラは自慢げに親指でバッジを指す。

「楽だったよ～。闘ったのは全部ジルっちだし。私は回収しただけ～」

「他力本願？」

「そのとーり」

「まあ俺としては逃げる時はバッジのことなんか忘れてたから嬉しい誤算だけどね」

「フッ。感謝するがいいさ」

「はいはい。カンシャシテマス」

「どうして棒読みなのかな」

「気のせいだろ？」

「短時間でよくそんなに仲良くなれたわね。正直びっくりよ」

「それはね～。嫌がる私をジルっちが無理矢理…「思いっきり地面に向けて投げたな、確か」ぶ～。先に言われた」

変なことを言われる前に口を挟んだ。

アイラは台詞を被せられて口をすぼめている。

「それで仲良くなるってどういうことよ」

「「絡みやすかったから？」」

何故かハモる俺とアイラ。

「ほんと仲良しね。合って1日とは思えないわ」

「それはそうと腹減ったな」

俺は強引に話題の転換を図る。なんかこの流れは危険な気がする。

「…そうね、食事にする？」

「わ～い。ご飯だ～」

俺達は食堂に足を進めた。

―…フッ

不穏な気配が俺の警戒心を掠める。

立ち止まり振り返った。

が、見渡す限り生徒に埋め尽くされていて今の気配の原因が誰、もしくは何なのかは皆目見当もつかない。

昨日のコトに関係するのか思考する。

「どうしたの急に？」

「…何でもない」

「そう？変なジルエス」

不思議そうに此方を見やるソフィー

「早く早くー」

アイラは先で呑気に手なんぞ振ってやがる。

「はぁ。分かった分かった」

今度こそ食堂に足を進めた。

この大会で何か起こらなければいいがと思いながらも、それが裏切られることを心の奥で密かに確信して。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0340t/

その心臓に宿るもの

2012年1月10日20時57分発行